

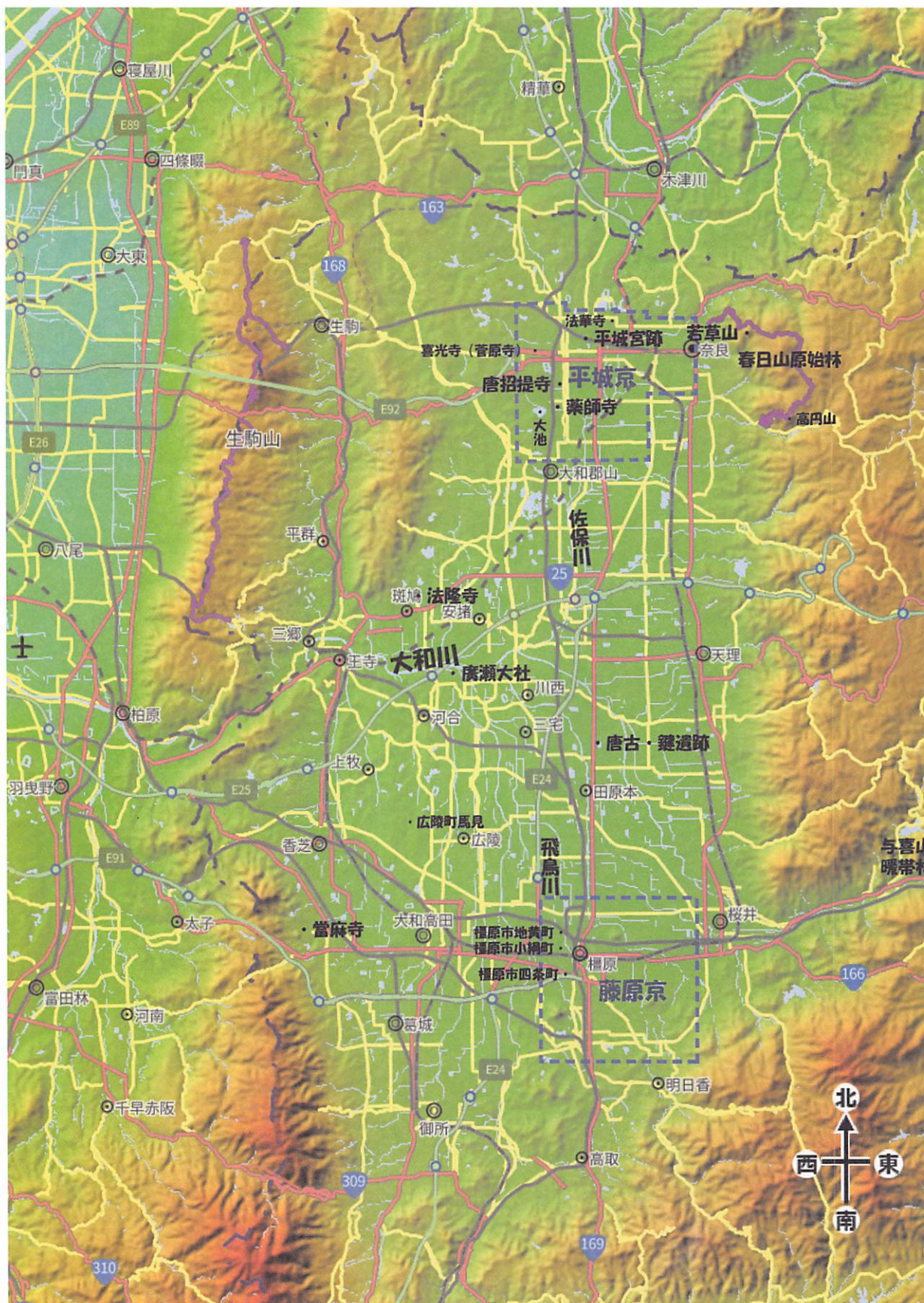
# 奈良SDGs 学びの旅



しあわせを  
祈る







奈良盆地とその周辺（河本大地 国土地理院のベクトルタイルを加工）



# 目次

---

はじめに .....	4
ESD－SDGsと奈良 .....	6

## 第1章 奈良を知る

---

奈良の歴史から見えるもの .....	10
奈良の自然環境 .....	13
奈良の地理的環境 .....	16
奈良には「ほんとうにいいもの」がある .....	18

## 第2章 奈良の魅力

---

奈良の心にせまる－永続と調和の文化－ .....	22
奈良とまちづくり－持続可能な長生きするまちと建物－ .....	26
奈良で学ぶ防災・減災－人と水との関わり－ .....	30
奈良に伝えられてきた文化 .....	34
奈良のわらべうた .....	37
奈良で考える命をつなぐ営み .....	40
奈良：懐かしい未来 .....	43

## 第3章 奈良で体験

---

日本の歴史文化「参加体験学習」のみやこ・奈良 .....	47
ならまちを体感しよう .....	50
旅あと－あとがきに代えて－ .....	53



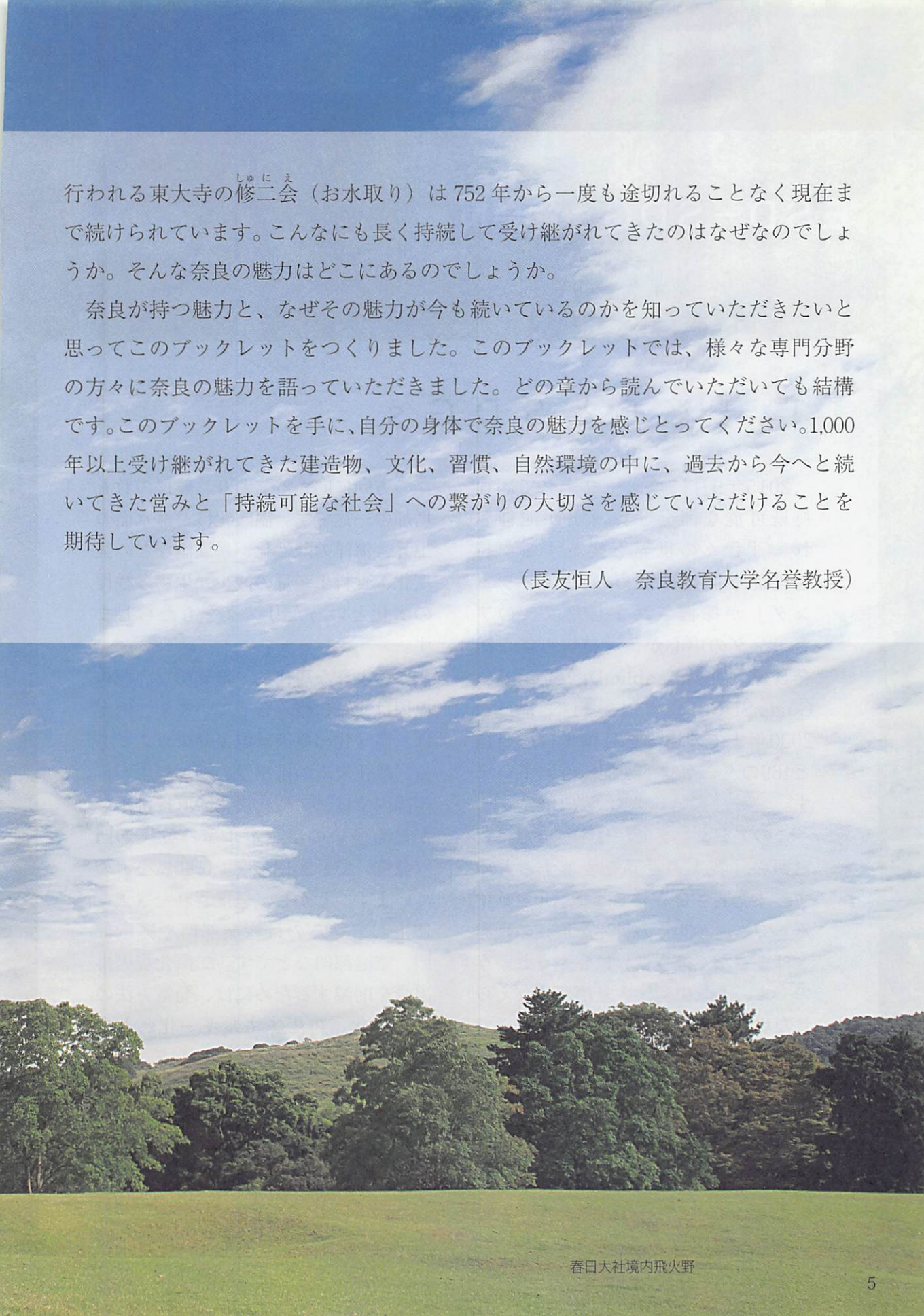
## はじめに

7世紀末に奈良盆地の南部に街並みが区画された大陸風の都、藤原京が造営されました。710年に藤原京から現在の奈良市と大和郡山市にまたがる平城京に遷都し、784年に現在の京都府の長岡京に遷都するまで、奈良は古代政治・経済の中心地でした。794年に長岡京から平安京に遷都しましたが、都が再び奈良に戻ってくることはありませんでした。しかし、東大寺、興福寺、元興寺、薬師寺、唐招提寺、春日大社など、荘厳な寺社はよそに移ることなく、奈良は今も日本の誰もが一度は訪れたいと思う心のふるさともなっています。

奈良には寺社や文化財、遺跡だけではなく、古代から1,000年以上も脈々と受け継がれてきた伝統的な文化が今も生き続けています。中でも、2月から3月にかけて







行われる東大寺の修<sup>しゆ</sup>二<sup>に</sup>会<sup>え</sup>（お水取り）は752年から一度も途切れることなく現在まで続けられています。こんなにも長く持続して受け継がれてきたのはなぜなのでしょう。そんな奈良の魅力はどこにあるのでしょうか。

奈良が持つ魅力と、なぜその魅力が今も続いているのかを知っていただきたいと思ってこのブックレットをつくりました。このブックレットでは、様々な専門分野の方々に奈良の魅力を語っていただきました。どの章から読んでいただいても結構です。このブックレットを手にも、自分の身体で奈良の魅力を感じとってください。1,000年以上受け継がれてきた建造物、文化、習慣、自然環境の中に、過去から今へと続いてきた営みと「持続可能な社会」への繋がりを感じていただけることを期待しています。

（長友恒人 奈良教育大学名誉教授）



# ESD—SDGsと奈良

## 1. ESDとSDGs

2015年9月にニューヨークで国連持続可能な開発サミットが開催され、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました。このアジェンダの中心が、「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals:SDGs）」です。SDGsには、2030年までの達成を目指す17の目標と169のターゲットが記載されています。

このアジェンダで注目すべき点は、冒頭の「我々の世界を変革する」です。「発展させる」ではなく「変革する」です。2030年の世界を現在の世界とはまったく違う世界にしようというのです。大量生産・大量消費に支えられた現在の世界では地球環境が持続できないことが明らかになっています。先進国と途上国の間にある経済格差、一国内でも資産のある一握りの人と貧困層の人たちとの格差は、社会を不安定にしています。国際社会は分断と対

立の方向に向かっており、難民の数も増加の一途です。温暖化は、海水面の上昇、海洋の酸性化、暴風雨などの強度化、食料生産量の減少、生物多様性の劣化といったリスクをもたらします。

このような現代的・地球的な課題の原因は複雑に絡み合っています。例えば、温暖化の原因は温室効果ガスである二酸化炭素の排出量の増加です。日本国内では、二酸化炭素の直接排出量が最も多いのはエネルギー転換部門（発電）で、2018年度では40%を占めています。しかし、発電された電気を使用しているのは産業部門や運輸部門、家庭部門などです。二酸化炭素排出量を削減するためには、発電方法の高効率化、再生エネルギー化とともに、他の部門におけるエネルギー使用量の削減が必要です。エネルギー使用量の削減は、経済に大きな影響を与えるでしょう。その影響は貧困層などの弱い立場の人々の生活を直撃するかも



しれません。一方で、SDGsの目標7「手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する」が達成されると、絡み合った問題が一気に解決に向かう可能性を秘めています。SDGsは現時点では世界の課題ですが、目標を達成することで持続可能な社会の実現に至るカギを示していると考えられます。

次は実施手段です。持続可能な社会を実現する実施手段として3つのものが必要です。1つは国際協力です。日本だけが持続可能な社会になるということはありません。世界はつながって

います。2つ目に技術とシステムの革新です。これまでも人類はさまざまな問題を技術革新で克服してきました。3つ目が持続可能な社会づくりに参加・参画しようとする人々の育成です。自らのライフスタイルを変革し、自分から行動し、多くの人たちと協働的に問題解決に取り組む、市民参画型社会が求められています。この持続可能な社会の創り手を育てる教育がESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）です。

## 2. 奈良で学ぼうSDGs

奈良には1,300年前の建造物や仏像、伝統行事が受け継がれています。奈良を訪問される皆さんは、これらに興味を持たれたり、楽しんだりされることだと思います。しかし、これらは観光資源であるばかりでなく、SDGsを学ぶための教育資源でもあります。

奈良に来られた方はどなたもたくさんのシカを目にされるでしょう。よく

勘違いされている方がおられますが、奈良公園のシカは飼育されているわけではなく、野生動物です。1957年に「奈良のシカ」として、国の天然記念物に指定されていますが、種としては、全国に生息するニホンジカと同じです。違いは、奈良のシカは人を見ても逃げない、ということなのです。そこには、人と鹿の1,000年以上にわたる



歴史があります。SDGsとの関連でいえば、目標15「森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る」が該当するでしょう。目標11「都市を包摂的、安全、レジリエントかつ持続可能にする」にも関連するという見方もあるかもしれません。室町時代以降、三ヶ大犯<sup>さんかたいぼん</sup>という奈良だけのルールもありましたが、明治

時代となりルールが撤廃されてからも、人と鹿の関係は変わっていません。一人ひとりの奈良の人のライフスタイルが、人と鹿の共生関係を形作ってきました。奈良のシカは、持続可能な社会づくりの3つ目の条件である、「社会づくりに参加・参画しようとする人々の育成」の大切さを学ぶ教育資源であるといえます。

### 3. 持続可能な社会の 創り手になるために

今は、誰もが「損か得か」といった経済重視の価値観を中心に行動しているように思えてなりません。持続可能な社会の創り手には、①世代間の公正（先人の良い社会にしたいという思いを受け継ぎ、未来の人のことも考えて行動する）、②世代内の公正（同じ時代を生きる弱い立場の人を配慮する）、③自然環境や生態系の保全、④互いの人権や文化の尊重、⑤幸福であることの5つを重視する価値観を身につけ、行動化するこ

とが求められます。

奈良には1,300年の時代を超えた「本物」があり、「本物」は見る者の感動を誘います。知識と感動の融合は価値観や行動の変革を促す深い学びになります。大人も子どもも持続可能な社会の創り手になる必要があります。そして、持続可能な社会の創り手を育てる「本物の」学びがあるのが奈良です。

（中澤静男 奈良教育大学准教授）



# 第1章

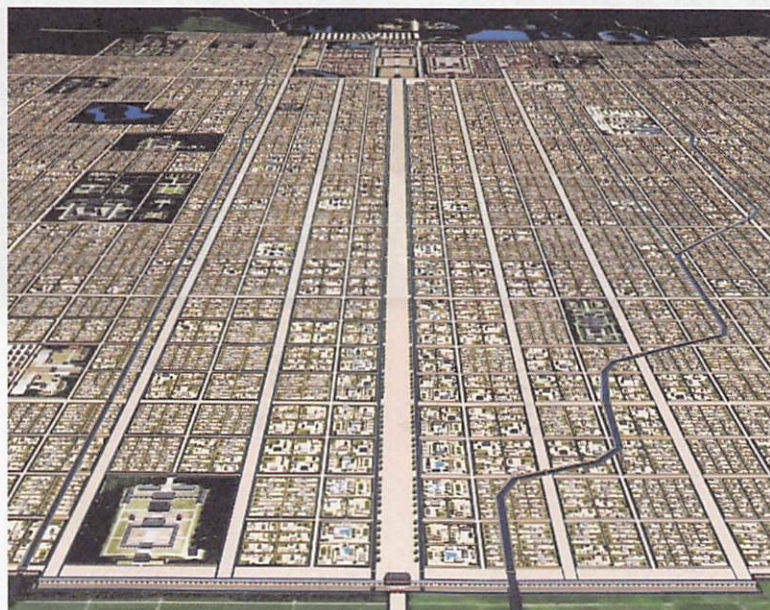
## 奈良を知る



唐招提寺 提供：一般財団法人奈良県ビジターズビューロー



# 奈良の歴史から見えるもの



CGで再現された平城京の街並み（提供：奈良文化財研究所）

## 1. 奈良時代の奈良

日本の歴史の時代区分の一つである「奈良時代」は、奈良の平城京に都が置かれた710年から都が京都の長岡京に移る784年までの間をいいます。奈良という地名の語源は、檜の木に由来するという説や、朝鮮語の「国」を意味するという説もありますが、国の正史である『日本書紀』に書かれた次のような地名説話が参考になります。崇神天皇の時代のこと、朝廷に反乱した豪族を討伐する際に軍隊が山の草木を踏みならした。それでその山を那羅山と名付けたという話です。このことから、ナラは平らにならした地を意味するという説が有力視されて

います。平城京にも「平」の字が用いられているので、中国風に平城と書いているので、当時はナラと読んでいたと考えられます。また、2014年に奈良文化財研究所の敷地から出土した「奈良京」と書かれた木簡から、遷都時にも今と同じ「奈良」と書いて、「ならのみやこ」と呼んでいたことが分かりました。

平城京は東西4.3km、南北4.8kmの規模を持つ広大な都で、さらに東側に外<sup>げ</sup>京<sup>きやう</sup>という張り出し部が設けられていました。都は東西南北に走る直線道路によって碁盤目状に整然と区画され、貴族や役人とその家族、商人や僧尼、一般庶民な



ど、およそ10万人が住んでいたと考えられています。また、地方から納税のために上京した人々や建設工事に従事する<sup>えき</sup>役夫など、全国各地から集まる人と物資でにぎわいました。「あをによし 奈良の

都は 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり」と万葉集に歌われた平城京の繁栄ぶりは、今も奈良に残る寺院や正倉院宝物などから偲ぶことができます。

## 2. 平城京の中の平城宮

平城京の中央北側には、周囲を高さ約6mの土塀（築地大垣）で囲まれた平城宮（1km四方の規模をもち、東辺の一部が張り出す）があります。現在の首都東京の皇居と霞ヶ関の中央官庁街にあたる場所で、「平城宮跡」の名称で約130haが国の特別史跡に指定され、遺跡の整備事業が進められています。中でも第一次大極殿や朱雀門、推定宮内省の建物、平城宮を囲む大垣などが当時の姿に復元され、古代国家の中核部である平城宮の威容を肌で感じることができます。

この平城宮に勤務した役人は約1万人

と推計されています。平城宮の中には、政治や国家的儀式をおこなう大極殿や朝堂院、天皇が居住する内裏を中心に、二官八省といわれるさまざまな国の役所が置かれていました。

現在、平城宮跡のシンボリック的存在になっている第一次大極殿は、2010年に平城遷都1300年を記念して当時の姿に復元されました。復元には10年に及ぶ歳月と、180億円もの建設費が投じられました。これを見ても、都づくりがいかに莫大な費用と、労力、時間を要した巨大な国家事業であったかが分かるでしょう。

## 3. 都づくりと環境破壊

平城京の直前の都「藤原京」（694～710）は、奈良盆地の南端近く（平城宮の南約20km）、大和三山に<sup>やまとさんざん</sup>囲まれた地に営まれました。わずか16年の短命の都でしたが、日本で初めて建設された中国式都城として有名です。この都の建設に使われた木材は、万葉集の「藤原宮の<sup>えき</sup>役民の作る歌」から、水運に便利な近江国（現在の滋賀県）の<sup>たなかみやま</sup>田上山で伐採され、<sup>おぐらいけ</sup>瀬田川→宇治川→巨椋池→木津川とイカダに組んで運ばれたことがわかります。

良質なヒノキ材を、水運を最大限に利用して奈良盆地まで運んだのです。現在の田上山は岩だらけのハゲ山になっていますが、これは古代以来の濫伐によるもので、流出した土砂がたびたび瀬田川の洪水の原因となりました。明治初年に全国初の近代的な砂防工事が行われ、山の緑は近年ようやく回復しつつありますが、藤原京や平城京の建設時に始まる自然破壊の後遺症が、1,300年後の今日にも深刻な影響を与えているのです。



復元された平城宮第一次大極殿の柱には、樹齢250年を超える直径70cmのヒノキ材が44本使われました。復元時には吉野産と熊野産の材をかりうじて入手できましたが、これだけ太い国産材の入手は次第に困難となり、2018年の興福寺中金

堂の再建時には、カナダ産のヒノキを代用材として用いざるをえませんでした。このように現在、歴史的建造物の保存修理や復元に必要な建築資材（太いヒノキ材やヒワダ、カヤなど）の枯渇が、文化財保護上の深刻な課題になっています。

## 4. 古代の疫病対策

新型コロナ感染症の突然の流行により、私たちの日常生活は大きく制約され、3密を避けた新たな生活スタイルの模索が求められています。こうした疫病の流行による社会的混乱や生活様式の変化は、1300年前の奈良時代にもありました。

『続日本紀』によると、735年に天然痘が九州の大宰府で流行し始め、737年には平城京や全国にまん延し、人々は恐怖と混乱に陥りました。時の権力者であった藤原四兄弟（武智麻呂・房前・宇合・麻呂）も次々と病死し、全国で100万人近い人々が亡くなったと推測されています。疫病は、唐や新羅、渤海との交流を通じて海外からもたらされましたが、平城京の住民はこの疫病にどのように立ち向かったのでしょうか。



復元された平城宮第一次大極殿（提供：奈良文化財研究所）

平城京の出土遺物から見た古代の疫病対策は、①病気の原因となる罪やけがれを人形（人間をかたどった木の板）に移して水に流す。②疫神（疫病神）の乗り物である馬をかたどった土製品（土馬）を壊して疫病の侵入を防ぐ。③疫神を饗応（ごちそうを提供）して退いてもらう。④呪術（呪符）によって疫神を退ける。⑤疫病退散を神仏に祈願する、などの方法がありました。また、疫病の流行を機に、大皿の料理を皆で取りあう食事法から、小型の食器に個別に食事を盛る食事法へと、生活様式が変化した可能性も指摘されています。平城京の疫病流行の背景には、活発な海外交流とともに、人口が密集する都市特有の糞尿やごみ処理などの都市公害も深く影響したと考えられます。

平城京は政治、文化、経済、仏教の中心地として栄えましたが、その陰で自然環境の破壊や都市公害、疫病の発生、物価の上昇や借金苦など、現代にも通じる社会問題も生まれたのです。ぜひ奈良を訪れて、日本という国の誕生の歴史に思いを馳せてほしいと思います。

（松村恵司 奈良文化財研究所所長）





## 1. ヤマトタケルの見た奈良の自然

「大和は国のまほろば たたなづく 青垣 山ごもれる 大和し美し (古事記)」  
(大和は国の中で最も素晴らしいところだ。重なり合う青々とした垣根のような山々に囲まれる大和は美しい)。この歌

は、東国征討の帰路にヤマトタケルが、故郷を想って詠んだ歌です、奈良盆地を囲む山々を青垣と表現して美しい奈良の自然を懐かしんでいます。

奈良盆地は、早くから人の影響を受け



コジイが金色に咲く春日山とニホンジカがシバを採食する、春日大社境内飛火野の草地 (左)、春日大社境内のイチイガシ巨樹群 (右)



てきました。今でも昔の森の姿を残している奈良市の「春日山原始林」や「春日大社境内のイチイガシ巨樹群」、桜井市の「与喜山暖帯林」、吉野町の「妹山樹叢」を元に推測すると、山地では春日山

のようにコジイが優占するシイカシ林にスギやモミの大径木が混じる森、平地では春日大社若宮神社辺りのイチイガシ林のような森が見られたのだらうと思われる。

## 2. 低地の森林

ヤマトタケルの頃の奈良には、今ほど人はいませんでしたが、人が増えれば農業や薪炭、材木として森林利用が進みま

す。その結果、今では平地には田畑や住宅地が広がり、奈良盆地を取り囲む青垣



奈良盆地北東部に位置する高円山のコナラ林の紅葉（左）、高円山から見た奈良盆地（右）

は、シイカシの原始林から落葉広葉樹林のコナラ林、ナラガシワ林、常緑針葉樹のアカマツ林、常緑広葉樹のアラカシ・ソゴ林、アラカシ・クログネモチ林などの二次林に変化しました。

## 3. 奈良南部の森林

奈良南部に位置する山々では、中世以降に吉野山から大峯山にかけて大峯修験道が隆盛しましたし、大坂や京都に木材を供給する木材需要が増えたために吉野川流域において天然林から木材を伐採する略奪林業が盛んになりました。また、今でこそ桜で有名な吉野山は、新古今和歌集の時代に花山になったと考えられており、百人一首の「吉野山こぞのしをりの道かへて まだ見ぬか

たの花をたづねん」（吉野山よ。去年枝折りして入った道を変えて、今年はまだ見たことのない方面の花を訪ねよう）をはじめ、西行法師によって多くの和歌が詠まれ、現在まで親しまれています。

人工林を育成する吉野林業が吉野川流



花矢倉から見た吉野山（左）、川上村のスギ人工林（右）





大峯山の弥山西尾根。シラビソ林の縞枯れと土石流跡が見える

域で16世紀に興り、江戸時代を通して林業は盛んにおこなわれました。明治維新以降も木材需要は衰えませんでした。第二次世界大戦後は戦後復興の木材需要が特に拡大しました。そのため拡大造林と呼ばれる森林政策の下で、全国各地でスギ植林地が仕立てられ、天然林が伐採されました。

山々の植生は標高によって変化してゆきます。拡大造林後に伐り残された原生な植生を見ると、400~800mはウラジロガシなどが主となる常緑広葉樹林、800~1,300mはブナ・ミズナラなどの落

葉広葉樹にモミ・ツガの混じる混交林、1,300~1,600mはブナ・ウラジロモミの混交林、1,600~1,700mはウラジロモミ・トウヒの常緑針葉樹林、1,700~1,915mはトウヒ林・シラビソ林が主な森林になります。

大峯山には近畿最高峰の八経ヶ岳(1,915m)と弥山(1,895m)があり、分布の中心である中部山岳地帯から隔離して常緑針葉樹のシラビソが分布しています。このシラビソ林では、列をなして一斉に枯れて樹木が更新する縞枯れ現象を見ることができます。しかし、近年では増えてきたニホンジカの採食圧によって縞枯れ更新が阻害されているようです。大峯山のすぐ東にある大台ヶ原は1,400~1,700mの隆起準平原の台地で、ブナ林やウラジロモミ・トウヒ林、ニホンジカの過剰な採食圧によるササ原が有名です。

## 4. これからの奈良の自然

奈良県は、全国平均と比べると森林率と人工林率が大きい県です。全国平均の森林率は65%でそのうち人工林は40%であるのに対し、奈良県の森林率は77%でそのうち人工林は59%にもおよびます。つまり、原生な自然があまり残っていません。残っている自然の多くは、宗教的な理由などで残されてきました。たとえば、大峯山では大峯奥駈道付近が守られてきて、現在は国立公園等に指定されていますし、春日山原始林は春日大社、与

喜山暖帯林は長谷寺・與喜天満神社、そして妹山樹叢は大名持神社の境内地として、またそれぞれが天然記念物として守られてきました。

残存する森林は少ないですが、大切に残された森林は低地から近畿最高峰まで見ることができます。そこには多種多様な草木が花を咲かせますから、四季折々に咲く花々を愛でて、後世まで残してゆきたいものです。

(辻野亮 奈良教育大学准教授)



# 奈良の地理的環境



奈良県とその周辺 (地理院地図のベクトルタイルを加工)



「奈良」という地名は、さまざまな範囲を指します。また、この本にはそれ以外にもたくさんの地名が登場します。3枚の地図を見ながら、奈良のイメージを膨らませていきましょう。

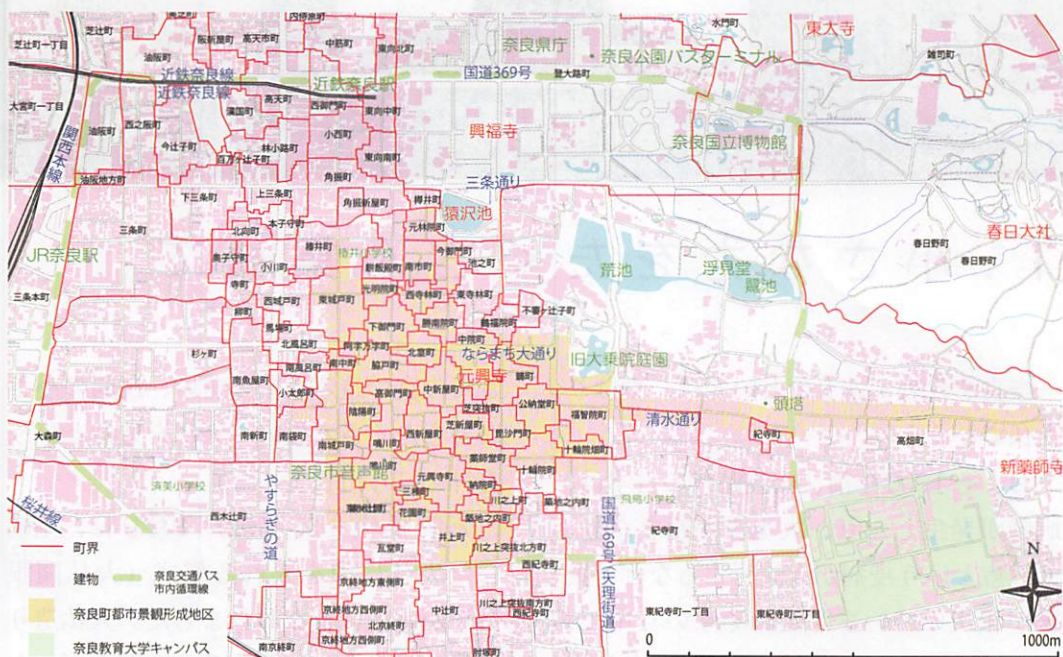
奈良県は、紀伊半島の内陸部にあります。奈良県とその周辺を示す図から、北西部の奈良盆地、北東部の大和高原、そして中部・南部は山地が多くを占めていることがわかります。奈良県の水は、淀川・大和川・紀の川・熊野川の4つの流れで海に注いでいます。

奈良盆地とその周辺は表紙裏の地図を見てください。古くはここに藤原京、そ

の後に平城京が置かれ、日本の中枢をなしていました。盆地内には、条里制の名残の残る水田や、環濠集落などがみられます。一方、大阪大都市圏の一部としての性格も持ち、市街化が進行しています。

ならまちとその周辺の図を見て下さい。近鉄奈良駅北側のきたまちと併せて、同じ読みですが、<sup>ならまち</sup>奈良町といいます。ここには古い町並みを大切にしたい暮らしがあり、個性豊かな寺社や店もあります。どんどん歩いて、奈良の奥深さを探ってみてください。

(河本大地 奈良教育大学准教授)



ならまちとその周辺 (国土地理院基盤地図情報の一部改変)



# 奈良には「ほんとうにいいもの」がある



東大寺大仏（盧舎那仏）



東大寺修二会大松明



解脱上人（貞慶）像（海住山寺）



興正菩薩觀尊上人坐像（西大寺）  
「画像提供 奈良国立博物館（撮影  
森村 欣司）」



フェノロサ「提供：日本フェ  
ノロサ学会」

## 1. 小さな力をたくさん集めて

奈良を代表するものといえば、やはり大仏でしょう。

およそ1,300年前、奈良時代の日本は、飢饉が発生したり、大地震が起きたり、天然痘という疫病が大流行するなど、災害が相次いでいました。そういう中で、聖武天皇は大仏を造ることを決意します。大仏の本当の名前は盧舎那仏るしゃなぶつといい、太陽のように、誰に対しても等しく、明かりと温もりを与えてくれると信じられていた仏です。

聖武天皇は「大きな力で造るな、たく

さんの富で造るな」と言い、民間の小さな力をたくさん集めて大仏を造るという方針を打ち出しました。

天平勝宝しょうぼう4年（752）4月9日、完成した大仏に魂を入れる儀式（大仏開眼かいげん会）が盛大に行なわれました。大仏造りに協力した人は、およそ260万人だったという記録が残っています。

その後、大仏は2度も焼かれましたが、そのたびに、小さな力をたくさん集めるという、同じやり方で復興されました。江戸時代に大仏を復興し、大仏殿を再建



したのは公慶<sup>こうけい</sup>です。公慶は全国を回って寄付を集めました。大仏殿の屋根を支えるには大きくて丈夫な木が2本必要でした。ようやく九州で見つけた巨木を苦勞して奈良まで運んできた公慶でしたが、

大仏殿の完成を見ることなく過勞死してしまいます。

後を継いだ弟子が完成させた大仏殿の大きな屋根を、2本の巨木は今も支えています。

## 2. みんなの幸せを祈って

奈良で最も有名な伝統行事は、「お水取り」の愛称で知られる東大寺二月堂の修二会<sup>しゅうにえ</sup>でしょう。大きな松明はとても人気があります。

「お水取り」は、奈良時代、大仏開眼の年と同じ天平勝宝4年(752)に、東大寺の実忠<sup>じつちゅう</sup>が始めたと伝えられています。そしてそれ以来、一度の中断もなく続けられているので、今年(令和2年、2020年)は1,269回目でした。

「お水取り」は、練行衆<sup>れんぎょうしゅう</sup>とよばれる東大寺の11名の僧侶が2週間にわたり、昼も夜も、二月堂に祭られている、大小2体の十一面観音におわびをする行事です。

なぜ、おわびをするのでしょうか。昔の人は、災いは人が悪いことをするから起きると考えていました。残念なが

ら、それでも人は悪いことをしてしまいます。練行衆は、すべての人々が犯した罪を十一面観音におわびをして、天下安穩<sup>あんなん</sup>・五穀豊穰<sup>ごこくほうじょう</sup>・万民豊樂<sup>ばんみんぶらく</sup>(世の中が平和で、穀物がよく実り、みんなが幸せになること)を祈ってくれているのです。大きな松明は、元来は暗い中を二月堂へ上っていく練行衆の足元を照らすためのものでした。

薬師寺の「花会式<sup>はなえしき</sup>」も、金堂の薬師如来におわびをして、国家繁栄・万民豊樂・天下泰平・五穀豊穰・仏法興隆を祈ります。仏さまにおわびをして、みんなの幸せを祈るのは、「お水取り」と同じです。奈良時代には、このように、仏様におわびをしてみんなの幸せを祈るという仏教の信仰があり、奈良ではそれが今もずっと続いています。

## 3. もっとよい世の中に

奈良時代には都として日本の中心地だった奈良は、都が京都へ遷ってから、東大寺の大仏や興福寺(藤原氏の氏寺)や春日大社(藤原氏の氏神)があることから、重要な場所であり続けました。そして、鎌倉時代になって、奈良は再び注目されるようになります。

治承4年(1180)12月、平氏による焼き討ちで、東大寺と興福寺は壊滅し、大仏も焼けてしまいました。しかし、その復興の過程で、さまざまな新しい息吹きが奈良に生まれました。

この時代は、末法思想(時の経過とともに世の中は悪くなるという考え方)が



広がっていましたが、世の中を良くするのも悪くするのも人だ、時の経過にはよらない、人の力で世の中を変えていこうという考え方と実践が生まれました。その代表的人物が、興福寺の貞慶と西大寺の叡尊でした。

貞慶は、衰えていた唐招提寺で釈迦念仏会を始めます。釈迦念仏会とは、人々が集まり、釈迦念仏を唱え、心一つにする法会です。50年ほどすると、本尊となる釈迦如来像を1万人が協力して造

られたほど、唐招提寺は元気になっていました。

叡尊は、700ものお寺を建てたり復興したりしました。しかも、鎌倉幕府の有力者からの大口寄付を断り、共鳴する人々（女性が多い）からのわずかな寄付を集めるという方式で、それをやり遂げました。元寇（蒙古襲来）の折には、攻めてきた敵兵の無事を祈った人でもありました。

## 4. 奈良に伝わる素晴らしいもの

明治の初めには「御一新」という言葉が流行しました。あらゆるものを新しくする。これまでのものはもういらぬ。明治の初めに日本の伝統文化が衰えてしまい、それまで大切にされてきた「古器旧物」(=宝物=文化財)が失われたのは、この「御一新」の風潮のためでした。

しかし、日本の伝統文化のかけがえない価値に気付いていた人もいました。その代表が町田久成です。明治4年(1871)、明治政府は、町田久成の提言に基づき、古器旧物を保存する取り組みを始めました。

歴史の真実を教えてくれる古器旧物。それが「御一新」の風潮の中で消滅しようとしている。これを防ぐために、明治政府は古器旧物の所在確認をし、多くの古器旧物を所蔵する古いお寺や神社の調査を行いました。

古器旧物の調査は、その後も精力的に続けられていきますが、その中心にアメリカ人のフェノロサがいました。フェノ

ロサは奈良に来て、世界でもっとも素晴らしい文化が日本(奈良)にあることを知ります。

明治21年(1888)6月5日、フェノロサは奈良三条通りの浄教寺で講演をしました。「奈良にある古物は、奈良だけの宝物ではありません。日本全体の宝物です。いや、日本だけの宝物ではありません。世界中探しても見つけることができない特別の宝物です。この古物を守っていくことは、奈良に住んでいる皆さんにとって、やらねばならない義務であるとともに、大いなる名誉であると思えます」。

奈良に素晴らしいものがたくさん残っているのは、自然なこと、当たり前のことではありません。守ろうとした人々、守り続けた人々がいたからです。素晴らしいものを未来に伝えていくには、そういう努力をこれからも続けていかなければなりません。

(西山厚 帝塚山大学客員教授)



## 第2章

# 奈良の魅力







春日大社境内飛火野

## 1. なぜ奈良か

奈良の大きな特徴といいますと、歴史が途切れていないということなのです。

お隣の京都はというと、千年の都を誇りますが、やはり歴史には紆余曲折があり、栄えている時代もあれば、苦難の時代もあります。京都で最大の事件といえ、まず「応仁の乱」が挙げられましよう。京は焼け野が原と化し、人々は難を避けて落ちのびた人も多くいました。京の文化が元に戻るのには百有余年を要したといえます。それはお祭りを見れば分かります。「日本三大勅祭」といわれるお祭りは京の「賀茂祭（葵祭）」と「石清水祭（男山放生会）」そして奈良の「春

日祭（<sup>ざるまつり</sup>申祭）」を指しますが、京の二祭は「応仁の乱」で断絶し、再び行われるようになるには実に百有余年を要しました。それに引き換え、春日大社の「春日祭」はほぼ断絶がありません。

それは都が奈良から京都に遷されたため、政治や経済の中心は京へと移りましたが、もともと聖地や霊地に建てられていた神社仏閣は都へ移されることなく、そのまま奈良に残されたのです。ですから、奈良は日本の神仏を祭る場所、心のふるさととして存在し続けました。奈良が京に対して南の都「南都」と呼ばれる由縁です。





春日若宮おん祭

とかく政治・経済の中心は争乱の地となりますが、「南都」は日本人の心の中心地として崇められてきたために、戦乱に巻き込まれることが少なく、戦乱や災害に遭遇した人々の逃げ場となり、心身の癒しの場ともなりました。奈良が「再生の地」と称されるのもこんな背景があります。

歴史が断絶していないということは、何が残ってきたのでしょうか。生きた人が生きた人に伝えてきたことが残ったのです。つまり、「祭礼」や「<sup>ほうえ</sup>法会」、「技術」や「伝承」ということが伝えられてきました。

たとえば東大寺の「<sup>しゅにえ</sup>修二会」(お水取り)は、天平勝宝4年(752)以来一度の断絶もなく、これまで1,300回近くも行わ

れてきました。春日大社若宮の「おん祭り」も、平安時代の保延2年(1136)以来、ほぼ断絶なく共に毎年厳かに行われ続けています。

「技術」という面では、正倉院宝物が今も厳然として受け継がれていることは、まさに世界の奇跡とされています。土に埋まった物が時折発掘されて世を騒がせますが、正倉院宝物は「伝世品」つまり建物の中に納めて伝えられてきたことを忘れてはなりません。近頃正倉院宝物の中に、多く日本で製作されたと考えられる物が研究の結果見つけられています。これらの高度な技術は寺社仏閣の修理や祭具などの新調によって今日まで伝えられていることも忘れてはなりません。



東大寺修二会



そして「伝承」では、『古事記』・『日本書紀』以来の神話が伝承され、それに

まつわる場所も大切に語り継がれているのです。

## 2. 自然との調和

日本の価値観は、「多様性の価値観」であるといわれています。あらゆるものに尊い存在が宿ると考えられ、山にも川にも海にも岩にも滝にも樹木にも神や仏の心、つまり宇宙のエネルギーが宿ると考えられてきました。それゆえに、「春日山原始林」は神や仏が宿られる聖地として千有余年大切に守られてきたのです。都市部に隣接して、広大な原生林が

存在するのは世界でもまれなことだそうです。そして、春日の神様のお使いとされる鹿は現在 1,388 頭（令和 2 年、2020 年調査）を数えます。

神・仏、自然、人間が調和して共存する奈良の存在は 21 世紀の世界が求める環境問題を解決する上においても、千年前から実践している素晴らしい事例に違いありません。

## 3. 春日山と鹿

春日山原始林は国の特別天然記念物に指定されており、古来春日大社の神山として、神の宿られる聖地として、9 世紀以来斧を入れない伐採禁止の山として保護されてきました。巨木の林相は、常緑広葉樹（カシ・シイ類）を主とした暖帯林ですが、温帯性・寒帯性の樹木も混生して、800 種に及ぶ多様な植物社会が形成されるという学術的にも貴重な存在です。

信仰の面では、春日山独自の信仰があります。神が人間の所業、つまり人の心が荒び、悪事を重ねて、世の中が乱れてくると、それをお嫌いになり、天へ還ってしまわれます。その前兆として、春日山の樹木が突然枯れ始めるというのです。この不思議な現象は、文暦 2 年(1235)

を初めとし、現在までに 13 回起こっています。最も近いのは天保 7 年（1836）で実に 10,779 本の樹木が枯れました。これを「山木枯楠」と呼んで、必ず日本の国に災いが起こると恐れられたのです。もしこのことが起これば、天皇に報告し、宮中に 1,000 年来伝えられている「御神楽」という秘密の音楽を、春日大社の神前で七晩連続して奏でます。一度行うには数時間を要するという壮大な音楽です。この時春日大社では、古いしきたりに則ってお供物を捧げ、「秘文の祝詞」という秘密の神への祈りの言葉を声を出さずに申し上げます。今もこの大切な祝詞は厳重に封印して保管され、もしこの「山木枯楠」があった際には対処できるようにされています。



次に鹿の事です。そもそも春日の神様は常陸国（茨城県）の鹿島神宮の神様で、国家国民を守るため、白い鹿の背に乗られ、柿の木を鞭にしてはるばる奈良の都にお来しになったのだと伝えられています。以来鹿は「御神鹿」と呼ばれ、春日様のお使いとして大切に保護されてきたのです。鹿という動物は一年の内で刻々と姿を変えます。角や毛色が変わっていくのです。また、角は毎年生えかわって新しく芽吹きますから、神秘的な動物でもあったわけです。こんなことがありました。あるとき、世界の環境を考え

るテレビ番組が奈良に撮影にやってきました。春日大社の境内を少し離れた所でカメラを回していた時、向こうから大きな角を持つ鹿が堂々と歩んできました。こちらからは小さな小学生が鹿の方に向かって歩いて行く、そして両者がすれ違い、どちらも振り向きもせず歩き続けて行ったというのです。撮影班の人たちは、自然の動物と人間が、普通にすれ違うとは、世界中どこにもないと驚いたのです。この関係に至るまで、奈良は実に1,000年の時間を有しているのです。

（岡本彰夫 奈良県立大学客員教授）

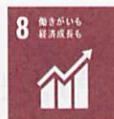


春日大社



# 奈良とまちづくり

— 持続可能な長生きするまちと建物 —



元興寺極楽堂

## 1. 首都で培われた建物の技術

その昔、奈良は日本の首都でした。その時代に造られた建物が今でも奈良には残されています。それらの建物には、それだけ長持ちするような高い技術が使われていることになりませんが、日本の中で当時の建物が残されているのは奈良だけです。別の見方をすると、そうした技術はほかの地方にはなかったことになりました。首都であったために、奈良でそうした技術が培われたことは容易に想像されるところです。

では、当時の建物はどこに残されているのでしょうか。それは東大寺や薬師寺、唐招提寺、法隆寺をはじめ、全てお寺の中にあります。ということは、お寺以外の建物は、全て失われてしまったことになります。それはなぜでしょうか。

まず考えられる理由は、首都が移転してしまったことです。平城宮は首都としての中核施設が置かれていた場所ですが、現在その地に行ってみると、大極殿や朱雀門のような最近復元整備された建



石場建ての柱  
地面に基礎となる石を置き、その上に柱を立てる。地面と柱が接していないので、土中の水分を柱が吸い上げることはない。



物がありますが、古い建物は一つも残されておらず、遺跡公園になっています。平城宮にあった多くの建物は、首都の移転とともに移築されたものと考えられて

います。これに対して、先に挙げた東大寺などの各寺院は、首都が移転しても奈良にそのまま留まりました。そのため、建物も残されたということになります。

## 2. 寺院の建物と技術

では、首都にあった建物はお寺以外は全て移転したのでしょうか。そうではありません。お寺以外にも残ったものはあったはず。そうだとすると、次に考えられる理由として、お寺以外の場所では長持ちするような技術が使われていなかったのではないかと、ということになります。

たとえば、住宅について見ると、当時は「掘立柱」と呼ばれる地面に穴を掘って柱を立てる方法で造られていたことが

発掘調査などによって分かっています。地面の中に埋まった掘立柱の脚元は年数が経つと腐ってしまうので、建物としては長持ちしないことになります。長持ちしているお寺の建物は基礎石の上に柱を立てており（「石場建て」と呼ばれる）、柱の脚元が腐りにくい構造になっています。一般の人々の住まいに石場建てが使われるようになったのは、ごく一部の例外を除くと、江戸時代に入ってからのことです。





ほったての  
掘立柱

地面に穴を掘り、その中に柱を置き、埋め戻して柱を自立させている。柱が土の中の水分を吸い上げるため、柱の足元が腐りやすく、長持ちしない。

したがって、石場建てが使われたという第二の理由も正解のように感じられますが、ここで立ち止まって冷静に考えて

みましょう。高い技術で建物を造れば、それだけで長持ちするのでしょうか。

### 3. 建物が長持ちする理由

そうではありません。どんなに優れた技術を使った建物でも地震や台風といった災害で被害に遭うことがありますし、日本の伝統的な木造の建物には火災の危険性もあります。また、どんなものも年数が経つと劣化します。例えば、丈夫そうに見える瓦の屋根も年数が経ってくると傷んでくるので、時々手を入れていかなければ、雨漏りで傷んでしまいます。

つまり、災害の被害を最小限にとどめる工夫、被害に遭った時の復旧、定期的

な補修や日常の維持管理といったさまざまな行為があって、初めて建物は長持ちするのです。お寺に残された建物はそうしたことが行われていたと考えてよいでしょう。

むしろ、お寺だからこそそうしたことができたのではないのでしょうか。お寺は多くの人々の信仰を集め、そうした人々が大事にしてくれるところです。人々に大事に守られてきたからこそ、お寺の建物は残っているのではないのでしょうか。



## 4. 長持ちする建物とまち

そのような見方をすると、残された建物が創建当時のままの形ではなく、時代によって形を変えていることがあるのが分かります。たとえば、元興寺の極楽坊ごくらくぼう本堂は創建時には僧侶の住まいでしたが、鎌倉時代に改造されて曼荼羅を祭る仏堂に姿を変えています。曼荼羅が人々の信仰を集めていたからです。

長く残ったお寺の建物が人々の信仰と関係していたことが分かったところで、あらためて、長く残った建物があるお寺と人々が暮らす「まち」の関係を見直してみましょう。奈良市の奈良町界隈は、古くからある住宅（町家）が多数残る地区として有名ですが、先に見た元興寺の曼荼羅は同地区の人々の信仰を集めていました。法隆寺には門前に西里、東里という地区がありますが、お寺の建物の工事をしてきた職人た

ちが暮らすなど、同地区の人々は古くからお寺と関係していたことが知られています。

このように、奈良にある古くからの雰囲気留めた地区の多くはお寺との関係が深い地区なのです。人々は、生業で得た収入の一部をお祭りや特別な行事の際に寄付することなどでお寺を助けます。お寺は建築工事や日常のさまざまな仕事を地区の人々に頼みます。頼まれた人々は、お寺の仕事が生活の助けとなるだけでなく、技術を磨くことができます。そうした技術は地区の人々の暮らしにも役立ち、生活の水準の向上に結びつきます。このように、お寺と地区に暮らす人々の関係は相互依存の関係だけでなく、地域経済の循環をはじめとするさまざまな効果を生む関係であったことが知られています。こうした関係は、首都が置かれた時代ではなく、首都が移転した後に徐々に構築されたことが知られています。

## 5. 長持ちしないまち

これに対して、奈良に首都があった時代にできた「まち」である平城京はどうでしょうか。

いくつかのお寺の境内を除くと、平城京があった所は、中核施設の平城宮が遺跡になってしまっているだけでなく、往時の雰囲気や全くといっていいほど留めていません。これは単に首都が移転したからというだけでなく、人々の暮らしと無関係につくられた「まち」だったからではないでしょうか。

古くから残された建物や雰囲気を留め

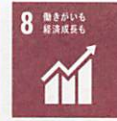
る地区は、これまで持続可能なまちづくりを実践してきたことになります。一方、遺跡と化してしまった所はそれができなかつた所ということになります。残されているものについては先人たちがどのようにしてそれを継承してきたのかを、また、失われてしまったものについてはそれはなぜかを学ぶことにより、将来の持続可能なまちづくりを考える糸口になるのではないのでしょうか。

（後藤治 工学院大学理事長）

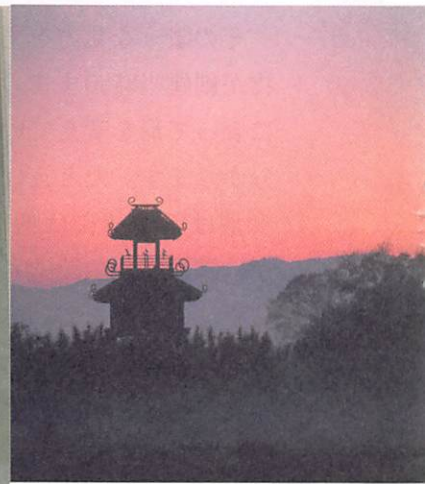


# 奈良で学ぶ防災・減災

一人と水との関わり



唐古・鍵遺跡（田原本町）の環濠集落と復元楼閣



楼閣（撮影：矢野建彦）



行基菩薩坐像（唐招提寺）「画像提供 奈良国立博物館（撮影 佐々木 香輔）」

まずは奈良県の地図を見てください（表紙裏参照）。北端の大和盆地（奈良盆地）の他は山々が続いています。大和盆地の面積は県全体の1割程度ですが、ここに人口のほぼ9割が集中しています。この地こそが律令国家・日本を生み出した舞台です。私たちの祖先はこの地をどのように使い、夢を実現させたのでしょうか。それを解く鍵が「人と水との関わり」です。

10万年前にアフリカを出発したヒト（ホモサピエンス）は長い旅路（グレート・

ジャーニー）の末、4万年前に日本列島に着きました。私たち生物は水なしでは生きられません。砂漠など水のほとんどない乾燥地が2割を占める地球では、陸地は広いものの水の豊かな土地は限られています。

日本は水に恵まれているといわれますが、水源を川に頼るだけに地域的・時間的に偏在します。水を安定して使うには、川の周辺を選ぶか、池や溝などを造って水不足に備えねばならず、たゆまない努力が欠かせないのです。



# 1. 大和盆地にみる「人と水の関わり」

その「人と水との関わり」を大和盆地で探りましょう。大和盆地は四方を山々に囲まれ、降った雨は唯一の出口である王寺町を目指して集まります。南からの飛鳥川などと北からの佐保川などが合流して大和川となり、大阪平野に流下します。河川が合わさる河合町には古くから廣瀬大社が鎮座し、天武4年(675)には朝廷が<sup>おおいのみかみ</sup>大忌神(水の神)を祭らせたと日本書紀は伝えます。水を鎮めるのは朝廷の大切な仕事。水を管理する重要さを熟知していたのです。

日本列島に到着したヒトが居住したのは意外にも山中で、私たちの住んでいる平地に下りるまでには実に長い時間がかかっています。

旧石器時代(日本では約7万年前～16,000年前)のヒトが用いた道具は、石を打ち欠いて作る打製石器でした。平城宮に近い法華寺南遺跡では、地下3万年前の地層から二上山のサヌカイトを打ち欠いたナイフなどの旧石器が発掘されました。ここは大和盆地北端の緩やかな丘陵地。旧石器時代の活動場所は盆地周辺の山中でした。

磨製石器を使う新石器時代は、日本では土器の使用と重なり、その紋様から縄文時代(16,000年前～3,000年前)と呼ばれます。大和盆地で発掘される縄文遺跡は、盆地中央部の沢沼地を避けて周辺の扇状地から発掘されます。なお東側の山中で発掘された桐山和田遺跡の土器は、

世界でも最も古いものの一つとされます。この発掘調査は淀川水系の布目ダム建設に向けて実施されたのですが、ダムの水は大和盆地に導水されており、水の縁で現在ともつながります。

弥生時代(3,000年前～3世紀)になると盆地低平地でも居住が始まり、その全期を通じて栄えた唐古・鍵遺跡が有名です。大型建造物や青銅器工場の跡地、全国からのヒスイや土器に加え、銅鐸の製造地ともされ、全国的な最重要拠点でした。環濠(居住地を取り囲む堀)は外敵の侵入を防ぐとともに濠の掘削で発生した土で嵩上げされ、治水効果を発揮しました。しかし濠の水は農業には使えません。田畑より低い所の水は使いようがなく、使えたのは堤を築いて上に貯める水のみです。このため日本書紀は池を造る意味には造・作・開の字を用い、決して「掘」は使いません。興福寺の猿沢池も西側に堤を築いて水をためており、「猿沢池を掘った」との表現は間違いです。ポンプが使えるまでヒトが利用できたのは、上にためた水のみです。近代水道が敷設されて130年、蛇口をひねるだけで水が使えるようになると水利用の本質が忘れ去られたようで残念です。

弥生時代には水田稲作が全国に広がり、定住し始めたヒトが大集落を形成します。大和盆地中南部では天皇家や葛城氏などが勢力を増し、古墳時代(3世紀後半～7世紀末)を迎えます。古墳時代



に力を拡大した大豪族も次第に天皇家の下に統合され、律令をもって統治する統

一国家の創生に向けて歩み出します。

## 2. 律令制度を支える水の確保

律令制度は、大化2年(646)の改新之詔から始まり大宝元年(701)の大宝律令でほぼ完成します。その根幹は公地公民制とそれを支える班田収授法にあります。公民に口分田を貸与した上で税を徴収する制度が確立されたのです。貸与される田の広さに差はあるものの満6歳以上の全員に貸与されました。思いのほか男女平等社会だったのです。

この動きの舞台となった大和盆地では、日本書紀が伝える仁徳13年(325)の和珥池、推古15年(607)の菅原池など5カ所の池や大溝の築造など多くの池・溝が開かれます。水田耕作が大和盆地の低平地にも拡大するのに合わせた事業の展開です。

生活基盤が安定すると人口は増加し、口分田が不足し始めます。そこで打ち出されたのが養老6年(722)の良田一百万町歩開墾計画と翌年の三世一身法です。百万町歩の開墾は、当時の耕地面積(推定値60万~90万町歩)と比べると、『良田倍增計画』ともいえる破天荒な計画で、その実現に不可欠な民の参加を求めるのが三世一身法でした。新たに池や溝を開けば三代、旧の池や溝なら一世代と差をつけつつも、一時的な土地私有を認める制度です。公地主義には反するものの水田不足には勝てなかったのです。なお開墾における水開発の重要性を熟知するだけに、水源開発の有無で差

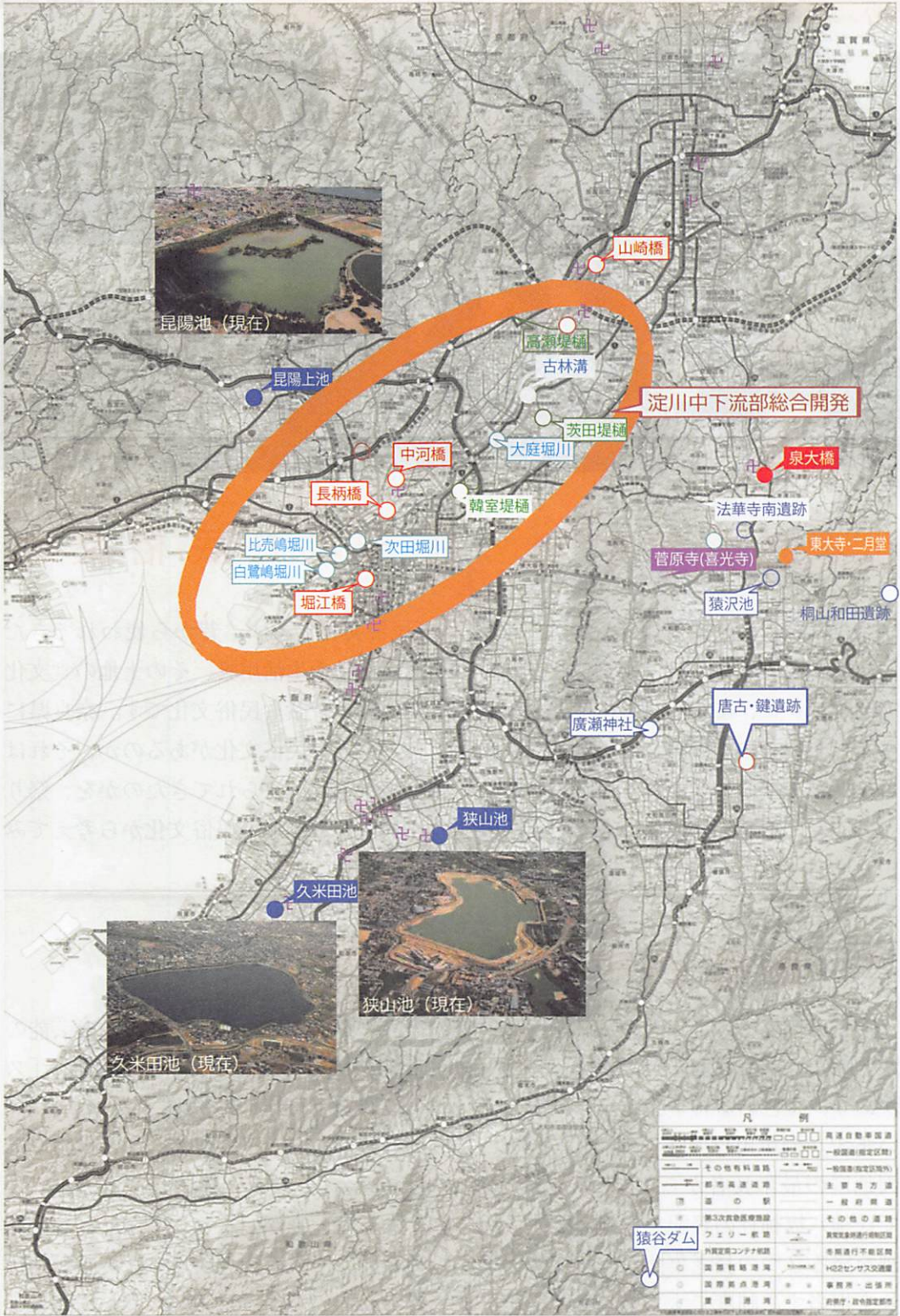
を付けたのはさすがです。

この制度を最大限に活用したのが行基とその弟子です。行基は大仏建立の勸進で知られますが、その真骨頂は畿内の各地で実施した水開発事業にあります。池だけでも、現在も満々と水をたたえる大阪の狭山池・久米田池・昆陽池を含む15池を築造しました。狭山池が現代になって洪水対策を担うダム湖に再生したように、いずれもが現在のダム湖に相当します。このほかにも淀川左岸の中下流部に広がる沢沼地を良田に変える一大総合開発事業を完成させています。そんな行基ですが、大和盆地で実施した事業は一つもありません。行基集団の本拠が平城宮に近い菅原寺であることを考えると不思議です。答えはただ一つ、大和盆地は既に水田として開発され尽くしていたのです。

現代になると大和盆地では水不足を補うため、水源施設の猿谷ダムなど4ダムと導水路を建設して、十津川・吉野川から大和盆地へ導水する十津川・紀の川総合開発事業が実施されますが、池・溝を使う水資源開発の原型は既に奈良時代に出来上がっていました。その大和盆地の景色を東大寺二月堂から眺めてください。行基の姿も浮かび上がるかもしれません。

(尾田榮章 水と人・解工師)





大和盆地と行基集團の主たる事業の地図 (国土交通省近畿地方整備局を加工)





柳生の神事芸能（ササラの舞）



上深川の題目立



地黄のスツケ行事

## 1. 生活の中から生まれた民俗文化

奈良県内には、数多くの祭りや芸能が伝えられています。その豊かなさまは、新聞やテレビ、またインターネットなどさまざまな方法で、離れた所からでも知ることができるようになりました。祭りや芸能だけでなく、普通の人々が生活の中から作り出して習俗となった文化が

「民俗文化」です。昔から使われてきた生産用具や生活用具、その土地の食文化や民謡や昔話も民俗文化です。奈良県にどのような民俗文化があるのか、それはどのように伝えられてきたのかを、祭りや芸能など無形の民俗文化から考えてみたいと思います。

## 2. 長老の中の「若い衆」

奈良市柳生には十二人衆（ジュウニン衆と呼ぶ）と呼ぶ宮座（氏神を祭る集団）があり、特色ある神事芸能を今に伝えていきます。柳生町は上下2地区に分かれ、両地区の最年長者から12人が一年交替で氏神八坂神社の祭祀を担当します。氏神を祭る2つの長老集団が一年交替で祭りを担当する制度です。その年の祭祀を担当する方の十二人衆のうち1人がネギとなり、神主役を務めます。毎月1日の

祭り、夏の土用の祭り、秋の神事芸能の奉納などを行います。神事芸能は、「スモウの舞」「ササラの舞」「ヨーガの舞」の3つがあり、祭りが終わると供物を下げて直会（ナオライ、酒宴）が行われます。

ある時、宴が始まり、座がにぎわい始めた時、一人の長老が使った奠座が片付けられていなかったもので、厳しく注意しました。その場は一度に緊張し、すぐに誰かが片付けに走りました。十二人衆の



うちもっとも新しく入った人3人は「若い衆」と呼ばれて、お茶やお酒の世話をします。年齢による序列があり、新人は

60歳を過ぎていても「若い衆」なのです。こうした年齢集団の規律の中で、古い芸能が守り伝えられてきました。

### 3. 子どもの中のオヤとコ

奈良盆地には野神さんと呼ぶ農耕を守る神が今も点々と祭られています。5月5日や6月初旬に、この野神の祭りが行われます。野神は百姓の守り神とされ、木が生えているだけであつたり、塚であつたりします。藁でジャ（蛇）を作り、野神の木に巻きつけたり、牛馬の絵馬を奉納したりします。盆地北部では大人の行事ですが、中南部では子どもが中心です。橿原市地<sup>じ</sup>黄<sup>お</sup>町では、5月4日にまず子ど

もたちがかまどの煤を体に塗りつけ合う「スツケ」をしてから、絵馬やジャを作り、翌日未明に野神のモリに参ります。この子どもたちは、15歳の者がオヤ（親）となってススのつけ役になり、そのほかの子どもはコ（子）となって、ススのつけられ役です。子ども集団の中にオヤとコという役割分担があるわけです。オヤの役割を終えると、青年団に入り、一人前の大人としての行動が求められます。

### 4. オヤを勤めて財布を持つ

今は奈良市になった旧都祁村<sup>つげ</sup>上深川には、ユネスコ無形文化遺産に登録されている「題目立<sup>だいもくだて</sup>」という青年の語り物芸が伝わっています。数えて17歳（今は高校1年生）になった青年を中心に、「厳島」や「大仏供養」などの源平の戦いにまつわる物語を秋祭りの宵宮に語ります。所作はほとんどなく、独特の抑揚を持った青年の清々しい声が魅力です。

この芸能を語るまでに、昔は3月15日に「ネハン」という行事がありました。釈迦<sup>ねはんえ</sup>の涅槃会のことですが、15歳の男子がコ、コウシュウ（子、子衆）となり、集落の中を袋を持って米や銭をもらいに回ります。そしてアブラゲ飯を炊いて、ほかの子どもたちに振る舞うのです。16歳の者はオヤと呼ばれ、子どもたちの集

まるヤドの家を探します。このオヤを済ました17歳は、イグイ（居喰い）と呼ばれます。米が残れば買ってもらい、オヤ中心に分配する。そのため「ネハンのオヤを済ましたら自分の財布を持つ」のだといいました。食事の世話役、集まる場所を決める役、食べるだけの役と年齢が上がるごとに、違う役割をしなければなりません。題目立という芸能を演じる前にこうした行事を務め、徐々に子どもたちは子どもから大人の道を辿り、最大の務めとして古くからの語り物芸を務めるという課題が17歳に設定されているわけです。上深川では、子どもは一人前の大人になる過程で、このように次々と行事が設定されていました。



## 5. 若連中・若い衆

かつての子どもたちは、まず子どもの集団に入り、次に若者の集団に入りました。酒一升を出して地元の共同作業である道作りに参加し、以後大人として扱われました。学校ではなく、地元で年齢別の集団があり、その中で教えられ、次第に成長するシステムがありました。山添村の中峰山という集落では、獅子舞の伝承のために、「若連中」の組織が昭和58年まで残っていました。数え17歳から23歳までの家を継ぐアトトリだけで構成され、23歳の者がトシガシラとして

絶対的な権威を持っていたといえます。

盆地中部の檜原市小綱<sup>しょうこ</sup>では、小学校の卒業後に「若い衆」として4歳から10歳ほどの年齢幅の者を集めてグループを組み、「親友会」など別々に名前を付け、生涯交際を続ける習わしです。こうした集落内の年齢による輪切りの集団は、檜原市四条町では「時代講」と呼ばれ、また広陵町馬見地区では、「伊勢講」として兄弟より濃い付き合いを続けるといわれています。

## 6. 生き延びる仕組み

民俗社会における年齢集団は、男性は子どもから青年・壮年・長老に至るまで、集落における年齢集団があり、その中で子となり、親となり、また子になったりしながら、経験を積み重ね、上位の集団へと移行していくという仕組みを発展させてきました。祭りや芸能は自由に好きな者だけがするのではなく、義務を果たすようにやらなければならないものとして演じられてきました。その背後には、祭りや芸能を行うことによって集落が存続するように、その構成員の成長を促すという明確な目的があり、こうした組織のおかげで現代にまで伝えられてきました。集落にはこうした集団だけではなく、伊勢講、念仏講などの信仰的講集団、また垣内や隣組などの地域の集団もありま

した。集落の中には、さまざまな原理による小さな集団が営まれ、それらが有機的に関連しながら、全体としてのまとまりを持って維持運営されてきたのが民俗社会でした。しかし今日、こうした伝統的な組織はあちこちでほろび始めています。祭りや芸能、民俗社会に対する関心は高まっていますが、その背景に人間が集団の中で成長し、その人々により集落が次の時代に生き延びていく仕組みがあることにも、注目をしてほしいと思います。

これからの社会のあり方を考える時に、民俗社会が練り続けてきた存続と成長のための周到な仕組みは、現代の社会でも学ぶ要素が多いと思われます。

(鹿谷勲 奈良民俗文化研究所代表)



# 奈良のわらべうた

3 すべての人に健康と福祉を



4 質の高い教育をみんなに



11 住み続けられるまちづくりを



奈良市音声館

## 1. 伝統音楽としてのわらべうた

わらべうたについての記憶を大学生に聞くと、ほとんどの学生の記憶が小学校の時代で止まっており、覚えているわずかなわらべうたの曲名も教科書に掲載されているものです。また、家の外で子ども同士でわらべうたを歌いながら遊んだ思い出はない、と答えた学生が9割以上でした。わらべうたというのは、実は私たちの身近にある日本の伝統音楽であるということにあまり気付いていないようです。日本芸術文化振興会のホームページには、わらべうたは日本の伝統音楽の「生活の中の歌唱」として分類されています。『音楽大事典』（平凡社、1983年）によれば、わらべうたとは、「子どもたちが遊びなどの生活の中で口伝えに歌い継ぎ、作り変えては歌い継いできた歌」をいい、「ごく日常的な行動の中でも、歌うという意識もないほど自然によく歌う。その中で子どもたちが、親、祖父母、

兄弟姉妹、友だちなどから遊びながら自然に教わった歌、つまり作者は問題にされず、遊び仲間によって集団的に伝承されてきた歌」なのです。

民族音楽学者小泉文夫は、音楽文化の基本的性格を調べる際には必ずその地域のわらべうたに注目すると書いています。その理由は、わらべうたは「その民族の言葉に密着しており、そこには生活環境が反映されている。またわらべうたの中にはその民族の古い習慣や信仰が残っていたり、文化の成長過程が投影されていることもある。」からです。つまり、わらべうたは長い間庶民の生活の中に存在してきた歌であるからこそ、歌詞に言葉や歴史、文化などの地域性が見られるのです。そして、その重要性が注目され、わらべうたは日本の各地に文化財として記録され、保存され、発展してきたのです。

## 2. 奈良市のわらべうたと世界遺産

無形文化財とは演劇、音楽、工芸技

術、そのほかの無形の文化的産物のこと



です。我が国にとって歴史上または芸術上価値の高いものを「無形文化財」といいますから、わらべうたは無形文化財の一つであるといえるでしょう。ここでは、無形文化財としてのわらべうたと世界遺産の関係について考えてみます。

奈良県のわらべうたに関しては、これまでにいくつかの歌集が刊行されてきました。昭和52年(1977)に奈良市教育委員会が奈良市のわらべうたを「奈良市の文化財調査中間報告書—石造物、わらべ歌、伝説—」にまとめています。奈良教育大学名誉教授、牧野英三氏は奈良県のわらべうたを収集して、昭和58年(1983)に「奈良のわらべ歌」として出版しました。平成11年(1999)には奈良市音声館おんじょうかんが「大和のわらべうた」を刊行しました。現在、奈良には200曲以上のわらべうたが存在していることが分かっています。また、これらのわらべうたは、その遊び方や歌詞の内容などによって「手まり歌」、「鬼遊び歌」、「歳時歌」、「なわとび歌」などに分類されています。その中に《おちゃらか》、《かごめかごめ》など、日本各地に共通して伝承されているものもあれば、《奈良の子守歌》のように、奈良という土地から生まれたものもあります。

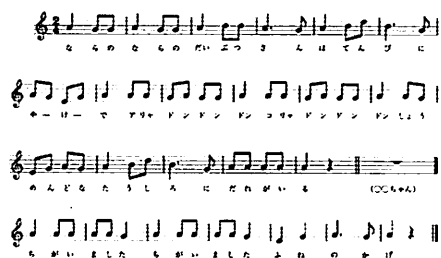
奈良県では、東大寺、春日大社、興福

寺など6つの国宝建造物と平城宮跡、春日山原始林の2つの特別史跡・特別天然記念物が世界文化遺産として登録されています。これらの建造物や建造物にまつわる行事を目の当たりにした当時の奈良の子どもたちが、遊びの中で自然とわらべうたを歌いだしたのでしょう。それらの世界遺産に関連するわらべうたで、前述の歌集に掲載されているのが《奈良の大仏さん》(2曲)、《おん祭の歌》、《大さむ小さむ》です。それぞれの歌の背景と歌詞は以下の通りです。

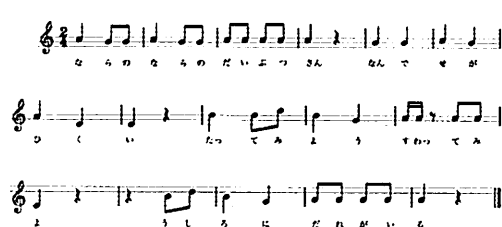
①《奈良の大仏さん》:わらべうたの《奈良の大仏さん》は鬼遊びの歌として遊びながら歌うもので、主に2つのバージョンがあります。1つ目の歌詞は次の通りです:「奈良の 奈良の大仏さんは天日に焼けて アリヤドンドンドン コリヤドンドンドン 正面どなた後ろに誰がいる」(譜例1)

奈良の大仏殿は、治承4年(1180)に平重衡の兵火で焼けましたが、十数年後に再建されました。永禄10年(1567)に松永久秀の兵火で再び被災し、その再建は142年後のことです。この歌の歌詞の「天日にやけて」という部分は、「大仏殿が戦火で焼けたことにより、大仏さんが長きにわたり雨ざらしになっていた状況を歌ったもの」といわれています。

(譜例1) 奈良の大仏さん  
ヴァージョン1



(譜例2) 奈良の大仏さん  
ヴァージョン2





2つ目の歌詞は少し短めです。「奈良の奈良の大仏さん なんて背が低い立ってみよう 座ってみよう 後ろにだれがいる」(譜例2)

大仏さんが立ったとしたら身長30mだそうです。子どもだけでなく、大人から見ても高いと思ったのでしょうか。

②《おん祭の歌》と《大さむ小さむ》: この2曲はいずれも春日大社の春日若宮おん祭に関連するわらべうたで、奈良市音声館はこの2曲を歳時歌に分類しています。春日若宮おん祭は、保延元年(1135)の大飢饉の際に、当時の関白藤原忠通が春日大社の若宮様をお迎えするため、「お旅所」に仮御殿を建て、穀物がたくさん取れるように、人々が楽しく暮らせるようにとお祈りしたのが始まりといわれています。

《おん祭の歌》の歌詞は次ようになっています。「せんじょいこ まんじょい

こ まんじょの道には 何がある 尾のない鳥と 尾のある鳥と せんじょいこ まんじょいこ」(譜例3)

この歌は、おん祭の宵の12月15日に、遍照院(餅飯殿町大宿所)へ雉などお供えするために、大宿所祭へ出かける人々の様子を歌った歌だそうです。

《大さむ小さむ》は、おん祭「お渡り式」(12月17日)の行列の最後に登場する槍持ちに声をかける様子を歌ったものだそうです。その歌詞は次の通りです。「大さむ小さむ もうすぐおんま おんまは槍持ち よう槍持った 重たけりゃ降ろせ 軽けりゃさっしやいな 大阪の源六さん 今日もこぐって また明日もこぐりましょ こぐりましょ」(譜例4)

この歌は、手合わせや身振りを入れながら「通りゃんせ」の遊びをするものです。

### 3. まとめ

ここでは、奈良のわらべうたを3曲紹介しましたが、いずれも地域の言語、歴史、習慣、信仰に関わるものです。これらの歌を次の世代に伝承することは、奈良県の無形文化財や世界遺産への私たちの意識、そして次の世代の人々の意識を

一層高めることになるのではないのでしょうか。また、これら以外のわらべうたも奈良県の文化に深く関連しており、地域の宝として調べて後世に伝えていくことに大きな意義があると考えています。

(劉麟玉 奈良教育大学教授)

(譜例3) おん祭の歌

(譜例4) 大さむ小さむ



# 奈良で考える命をつなぐ営み



家で生まれた赤ちゃんの産湯

## 1. コスモポリタンな奈良の都

奈良に都があった8世紀、そこはどんな町だったのでしょ。大陸から見れば、日本は朝鮮半島の向こうにある島国で、奈良は中国や韓国からの移民が行き交うにぎやかな都だったよう。当時の人々は、いったいどんな言葉で会話をし

ていたでしょう。日本語、韓国語、中国語が交じり合っていたのでしょうか。その頃は、現在より国境の垣根が低く、人の交流が盛んだったよう。奈良は多文化が共生するコスモポリタンな町だったのでしょ。

## 2. 多様な命を受け継ぐ

さて、私たちが今ここに生きているのは、女性から女性へと命が受け継がれてきたから。仮に、私と母、母と祖母というように、順に娘と母が手をつないで人類の進化をさかのぼっていくと、どこかで人類とサルに分岐点にたどり着きます。そこまでの距離は、私たちが想像するよりずっと短いそう。人間

と動物の距離は意外と近いの。そして、現在の私に至るまでに、地球上のあちこちで民族や肌の色、職業、境遇の異なる母たちがさまざまな人と出会って子どもを産み、あるいは子どもをもらって育て、今の私につながっています。奈良時代から現在まで私たちの社会が続いてきたのは、女性が家族以外の人たちと交



わって子どもを産み育て、命をつないできたからと言えます。そう考えると、人の移動、平等、健康（命を守ること）、平

和や安全、飢餓や貧困の撲滅を保障することは、人類の社会がこれまでも今後も存続する上で大切な条件だと言えます。

### 3. 産むこと・育てること

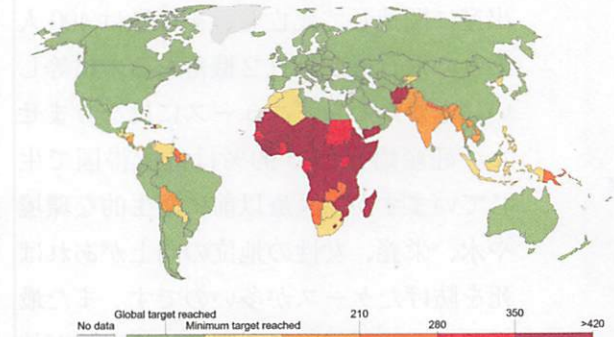
では、ここで女性に注目してみましょう。食べて排泄することが人類にとって自然な機能であるように、産むことも生理的な機能です。出産のたとえとして、最近「鼻からスイカ」といわれますが、赤ん坊は鼻の穴からではなく、伸び縮みする産道を通して出てくるので心配は無用です。出産がとても危険なことなら、人類はとっくの昔に滅んでいたでしょう。考えてみれば、排泄と出産は似ています。どちらも出口がほぼ同じところにあり、寝て行うよりも垂直な姿勢で重力を利用する方が合理的で、かつどちらもあまり人に見られたくない行為です。昔の女性は自分一人で、あるいは家族の手を借りて子どもを産んでいました。助産師（戦前は産婆<sup>さんば</sup>と呼ばれた）のような免許を持つ専門家が登場するのは、日本では1900年ごろからですから、奈良時代の女性たちは家で人に見られないようにして垂直な姿勢で産んだのでしょう。そして、生まれた子どもの臍<sup>へそ</sup>の緒を自分で、あるいはそばにいる人に切ってもらい、無事出産を終えました。お産に必要な物と言えば、臍<sup>へそ</sup>の緒を切る道具と赤ん坊や母の体をくるむ布ぐらいで、出産自体はとてもシンプルな、どこでもできる行為でした。そうでなければ、人類は存続できなかつたでしょう。今のように病院で出産するようになったのは、アメリカ

では1930年代、イギリスでは1940年代、日本では1960年代ですから、人類の進化から見れば病院出産はとても新しいことなのです。かつての出産は、結婚式と同じ儀式やお祝いごとでした。子どもの誕生は、その社会が未来に渡って存続する証でしたし、高貴な人の出産は、リーダーとなる人の地位や権力を目に見えるようにする重大なできごとでした。

でも、私たちは学校の歴史で、女性がどんなふうに子どもを産み育ててきたのかを習いません。女性が担っていた育児や料理、衣服作りも人類の歴史の重要な一部だとすれば、女性にスポットライトを当てて歴史を見ることもできたはずで、でも私たちが学ぶのは、英雄（たい

#### Maternal mortality ratio, 2015

Maternal mortality ratio is the number of women who die from pregnancy-related causes while pregnant or within 42 days of pregnancy termination per 100,000 live births. SDG Target 3.1 is to reduce global maternal deaths to less than 70 per 100,000 live births and all countries less than 140 per 100,000 live births.



Source: World Bank

#### 妊産婦死亡率(2015年)

妊産婦死亡率とは、妊娠中あるいは妊娠終了後42日未満に、妊娠に関連して生じた死亡を出生10万人当たりで計算した数値のこと。SDGsのターゲット3.1では、世界の妊産婦死亡率を出生10万人あたり70未満に削減すること、そしてすべての国で140未満にすることが目指されている。出典:世界銀行



てい男性です) が登場して国を統一する話や、世界のあちこちで起こる戦いの話です。もし人類の半分を占める女性に注目していたなら、今とは異なる歴史に出会えたことでしょう。このように女性と

男性に同じ力を与えることをジェンダー平等と言い、今後の社会の達成目標の一つとしてSDGsに挙げられています。ジェンダー平等の視点に立てば、世界はまた違った見え方をするようになるでしょう。

## 4. ジェンダー平等と女性の健康

東大寺の大仏(752年に大仏開眼供養)が建立された背景には、天然痘の流行や飢饉、地震、聖武天皇の王子の死があったといわれています。聖武天皇は指導者として、当時の仏教の考え方に基づいて大仏建立を社会の安定のために計画したとされています。現代に生きる私たちは、地球全体を視野に入れて、民主的な政治や人道的な手段によって貧困や病気を減らし、格差をなくし、抑圧のない社会の実現を目指しています。

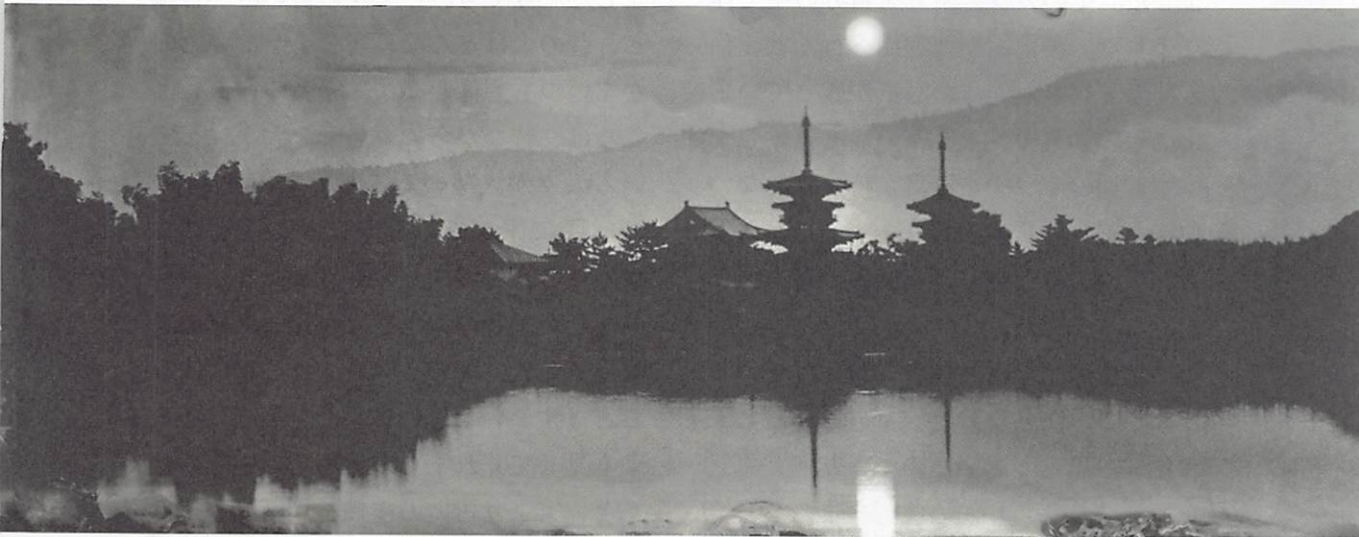
ここでジェンダー平等の話に戻りましょう。なぜジェンダー平等が重要なのかと言えば、それは健康や命の尊厳(死亡率の低下)に関わるからです。世界保健機構(WHO)の調査では、2017年には世界で年間約30万人の女性が妊娠・出産に関連して死亡し、その数は400人乗りの飛行機が毎日2機落ちるのに等しいにもかかわらずニュースにはなりません。妊産婦死亡の99%は低所得国で生じていますが、医療以前に衛生的な環境や水、栄養、女性の地位の向上があれば死を防げたケースが多いのです。また最近では、低所得国で利潤目的の病院が林立し、不必要な帝王切開が増え、女性が産後につらい思いをすることが増えています。私が行くバングラデシュの村では

病院で産む人が増え、それにつれて帝王切開が増え、女性は産後に水汲みや家事をする体力がなくなり、かつ帝王切開の費用が家計を圧迫するようになっています。女性たちが自分の体や妊娠・出産、性交渉についての知識をもっと持っていたならば、あるいは女性の体や人権が尊重されていたならば、むやみに帝王切開を勧められずに済んだでしょう。またバングラデシュの村では、女の子は14~15歳で結婚し、学校をやめ、すぐに妊娠して母親になります。若い女の子の方が夫や姑の言うことをよく聞くので早婚が好まれるのですが、女性は人格形成の途上で結婚すれば、妻や母の役割に限定されてしまい、能力を伸ばす機会を失います。母親の読み書き能力は、新生児や乳幼児の生存や健康に密接につながるので、ジェンダー平等は女性の健康や命を守るだけでなく、次世代の健康を原点で保障する上でも必要なことなのです。

SDGsに掲げられた目標は、人類が共に生きるための基本的な課題だという点で、聖武天皇が大仏に願いを込めた奈良時代から現在まで人類が共有すべき重要な価値観だといえるでしょう。

(松岡悦子 奈良女子大学名誉教授)





大池から薬師寺と春日山を望む（筆者撮影）

奈良市西の京の夜明け前、大池に紫の霧が漂っています。池の向こうにそびえる薬師寺の塔が、ほんやりと水面に映っています。この景色は日本画家平山郁夫の絵画のように美しいです。どこからか、池の暗がりから鴨の鳴き声が寂しそうに聞こえてきます。このような情景を眺めると、静寂な気持ちになります。早起きして良かったと、こんな時に思います。奈良の夜明け前の時間を歩くと、まるでタイムスリップしたように町が見えます。池の向こうの薬師寺の情景は、確かに1,300年前と大して変わっていないようです。

肌で感じられる古の日本の雰囲気がある場所が好きです。奈良に来ると、そのような場所がたくさんあります。薬師寺をはじめ<sup>たいまでら</sup>當麻寺などのお寺や、鹿が自由に歩く奈良公園を散歩すると、その古の思いを写真に収めたくになります。今朝もその気持ちで早起きしました。池の向こ

うに若草山を青紫に染めている空の影が、また絵画のようです。空が紫から緋色に変わり、だんだんと山吹色へと広がります。昔、万葉の歌を詠んだ人たちもこの同じ情景を見て、同じように感動したのだらうと朝の涼やかな微風を感じながら、そのようなことを妄想します。こんな時に、心と体が元気になります。

太陽が昇る前に、車から木製の大型カメラを取り出します。池の前に三脚の位置を決めて、カメラを設置します。カメラの位置を上手く決めれば、太陽がちょうど薬師寺の塔の辺りから昇る時の風景写真を撮ることができます。これは写真家の大事な仕事です。次は携帯暗室のテントを立てます。これは幕末時代の写真家たちがやった作業と同じです。当時の人は、もちろんデジタルカメラを持っていませんでした。デジタルの時代を想像もしなかったでしょう。150年前の写真家は、撮影現場で暗室テントの中



に入り、写真用の薬品をガラス板に付けました。そのガラスネガを自分の手で作りました。美術館や博物館へ行くと、幕末期の写真家が作った写真が残っています。その写真を見ると、いつも感動します。普通のデジタル写真が持っている独特な美しい質感があります。だから僕も、そのような感じで薬師寺の塔を撮りたくなりました。

小学生の頃、古い校舎にお化けがいるという噂がありました。夕方になると、お化けが出ると聞いたので、友達と勇気を振り絞り、たしかめに行きました。結局、お化けは現れなかったけど、古いものが好きになるきっかけとなりました。歴史の学科も好きでした。でも、歴史人物の名前や年度などを覚えるのは得意ではなかったです。それより、学校の遠足

で古いものを見ると、いつもワクワクしました。今でも、どこかの古い町へ行くと、昔の人はどんな暮らしをしていたのかをいつも想像します。奈良のすごいところは、昔ながらの暮らしを大事にしている人々が大勢いることです。築300年の家屋に住んでいる奈良の友達もいます。彼の家を案内してもらったことがありました。昔の大工さんが作った立派な家屋でした。家族が300年同じ家に住むことはすごいと思いました。裏庭にある蔵も見せてくれました。薄暗い中をのぞくと、家より古い刀や鎧、調度品や掛け軸がたくさんありました。その蔵は、まるで博物館のようで興味深かったです。近所の人々も同じくらいの古い家に住んでいました。ある近所のおばさんの話を聞いて、びっくりしました。1,500年



手づくりのガラスネガ



前にさかのぼる家族史が書かれている書物とその家の蔵にありました。そのおばさんの家に招待され、お茶を飲みながらご先祖さまの言い伝えを聞きました。おばさんの話がきっかけで、自分のおじいさんやおばあさんは若い頃、どのように日常を過ごしていたかを知りたくなりました。あの近所の人たちと仲良しになったおかげで、地元のお寺の行事に誘われました。若者たちが元気いっぱいにおみこしを担いで町中を走りまわっていました。僕も参加させてもらって、みんなと幸せな気持ちを分かち合いました。一緒に参加した地元の人々の中には、普段は工芸や伝統的な仕事をしている人もいました。彼らの話を聞くと、奈良には十数世代続いて伝統的な仕事を代々している家が少なくありません。もちろん、大工さんや庭師さんもいっぱいいるし、800年も続いている刀を作る家の人もいました。450年も続いている墨の工房がありました。そこを訪れると、すごく良い香りがしました。有名な和紙職人の工房や力強い焼物を作っているおじいさんの工房も訪れました。僕は陶芸が好きなので、焼き物の工房で一目惚れした茶碗が欲しかったのですが、値段が高かったのです。「そんなことはないですよ。」と奥さんに言われました。「ずっと大事にすれば一生使えますよ。」なるほど、そう考えると高くないです。結局、そのお気に入りの茶碗を買って帰り、今も毎日大事に使っています。

奈良の田舎へ行ったとき、古い農家を借りて田んぼを耕して米を作ったり、畑で野菜を育てたりしている若者たちに会いました。ある若い夫婦は、昔の人が食べていた野菜の種を集めて、今では、数十種類の「大和野菜」を栽培しています。また、近所の仲間たちと手作り味噌を作ったり、大和野菜が味わえる農家レストランを運営したりしています。僕は、そこで初めて、蘇を食べました。蘇は古代のチーズです。7世紀ごろインドから来た人がその作り方を教えたといわれています。牛乳をゆっくりと煮詰めて固めると美味しいチーズができます。さらに乳酸菌で発酵させると、醍醐という別の古代チーズを作ることができます。奈良時代の人々は健康のために食べたようです。

奈良へ行くと、いつも新しい発見や感動があります。奈良には平城京の時代から続いている伝統や生活習慣がありますから、日本でタイムスリップのような経験を肌で感じる場所が最も多いのではないのでしょうか。また、元気いっぱいの若者たちが伝統野菜や手づくり味噌などを使った新しい美味しい料理を創作していますが、それを食べると「懐かしい未来」を感じます。奈良にはこれからの持続可能な時代のモデルがいっぱいあるのです。

(エバレット・ケネディ・ブラウン 写真家)



## 第3章

# 奈良で体験



春日若宮おん祭



# 日本の歴史文化 「参加体験学習」のみやこ・奈良

4 質の高い教育を  
みんなに



8 働きがいも  
経済成長も



9 産業と技術革新の  
基盤をつくろう



薪御能 (提供: 薪御能保存会)

## 1. 教育と観光の新しい融合の力

英国が平成12年(2000)に推進した『ミレニアム・エクスペリエンス』事業は、「教育で、英国の持続可能な発展を創る」という画期的な事業でした。中核となったのは、ユニークな図書館とイベント・ホールを増設した『大英博物館』、火力発電所を新美術館に大改修した『テートモダン』、デジタル技術を最大限活用した科学館『@ブリストル』、鉱山の廃坑を世界最先端の植物園にした『エデン・プロジェクト』でした。これら全てに共通した基本的な考え方が「参加体験学習」です。これによって、まず社会教育機関に、展示重視から参加体験重視へという大転

換と新しい活力創造を産み出し、国連のESDの推進とも結びつく大きな潮流になりました。そして、教育と文化観光交流が融合した、経験が新しい価値の源泉となる「経験経済」という大きな経済波及効果も生み出しました。

日本では、平成17年(2005)開催の『愛・地球博』と、平成22年(2010)開催の『平城遷都1300年記念事業』に参加体験学習が積極的に導入されました。特に『平城遷都1300年記念事業』では、平城宮跡全体をフィールドミュージアムに見立て、誰もが天<sup>てん</sup>平<sup>びょう</sup>人<sup>びと</sup>になりきれ、参加体験価値の高い多様なプログラムでした。



また、奈良の歴史文化資源と文化観光交流資源を満喫できる『巡る奈良』事業を積極的に進め、大きな経済効果を生み出しました。

奈良は、日本の生きた歴史文化を学ぶ

場として最高の舞台です。教育と観光が融合した新しい参加体験学習の日本の首都です。この視点から、奈良の参加体験学習プロジェクトの魅力と可能性について、具体的に語ってみましょう。

## 2. 参加体験学習の魅力と可能性

### ① はじまりの、エクスペリエンス奈良

奈良は、日本の律令国家形成の舞台ですが、それを実現させた古代の人々の多様な「はじまりの物語」が存在することにまず注目しましょう。「山地霊場」、「古墳文明」、「仏教伝来」、「神仏習合」、「都城建設」、「記紀万葉」など、奈良を舞台に多くの「はじまりの物語」が存在しています。ここに、お酒やお茶や花、芸能、貨幣などの具体的な「モノ」や「コト」の「はじまりの物語」を加えることもできます。

古都奈良に絞って、『天武朝百年の夢』にフォーカスしてみましょう。西暦660年に東アジアに出現した巨大な唐帝国の存在と圧力の中で、日本はどのように生きてきたのか。この古代日本の律令国家形成の「はじまりの物語」は、飛鳥京～藤原京～平城京へと続く『都城建設』を舞台に生み出された「古事記」、「日本書紀」、「風土記」の編纂や、「国分寺・国分尼寺建立」、「大仏開眼」、「正倉院」、「万葉集」など、多様な『はじまりの奈良』の体験学習の場と機会につながっていきます。

### ② 対話と交流のフィールドミュージアム奈良

奈良には、『古都奈良の文化財』と『法

隆寺地域の仏教建造物』、『紀伊山地の霊場と参詣道』の3つのユネスコ世界文化遺産があります。合わせて、「能楽」、「雅楽」、「神楽・田楽<sup>かぐら でんがく</sup>」、「和食」、「工匠の技」などの無形文化遺産の宝庫でもあり、有形と無形の文化遺産が融合し活性するまれな地域です。もちろん、それぞれに対応する歴史的建造物や博物館や美術館などの社会教育施設が存在していて、多様で多彩な常設展と企画展が日々展開されています。まさに奈良は、面的な広がりを持った「対話と交流」のフィールドミュージアムの王国です。

### ③ 静けさと華やかさが共存する、イベントロジー奈良

豊かな自然と多彩な歴史時間との共生の中で展開される奈良のイベントには大きな特徴があります。平城遷都1300年祭の総合プロデューサーを務められた木



天平人なりきり体験



村尚三郎東大名譽教授は、奈良のイベントの特質について、「静けさと華やかさの共存」と評価されました。年明け早々の「若草山の山焼き」、春を告げる東大寺二月堂の「修<sup>しゆ</sup>二<sup>に</sup>会<sup>え</sup>」はもちろんですが、市民が主体で作りに上げた「奈良燈<sup>とう</sup>花<sup>か</sup>会<sup>え</sup>」や「天平祭」など、市民参加型のイベントが、熱く・深く・永く持続しています。奈良で展開される多様多彩なイベントは、SDGsやESDの実践的な舞台や機会となっていくでしょう。

#### ④ 花も実も満喫できる、クラシックス奈良

1,300年以上続く奈良の「ものづくり」と「おもてなし」を体験学習することも、奈良の大きな特質です。前述したように奈良は、有形遺産と無形遺産の宝庫であり、「花も実もある日本美」の宝庫です。加えて、吉野<sup>よしの</sup>葛<sup>くず</sup>や三輪<sup>みわ</sup>素<sup>そう</sup>麵<sup>めん</sup>、奈良漬、日本酒など、日本の食文化を生み出してきた場所です。

国内外からは「クラシックス価値の宝



「やたがらす菩提<sup>ぼだい</sup>苧<sup>お</sup> 純米」添<sup>そ</sup>え掛<sup>か</sup>け麴<sup>こう</sup>造<sup>ぞう</sup>り (提供: (株)北岡本店)

庫=奈良」への磨き上げが期待されています。「クラシックス」とは「特定の分野と特定の時代で、一番上等」という意味です。時代に適応しながら最高の存在を守り続けているモノやコトに与えられている表現です。特に、奈良の工芸品にはその可能性があります。奈良では、「クラシックス奈良」を意識した工芸品の復元や、それと連携した新しい「生活美術文化用品」の開発と販売が活性化しています。

また、持続可能な食文化の育成を目指した「奈良産の食材復興」の動きも生まれています。これらの動きは、奈良のまちづくりや衣食住の多彩な分野に広がり始めています。

## 3. 教育と観光の融合力による

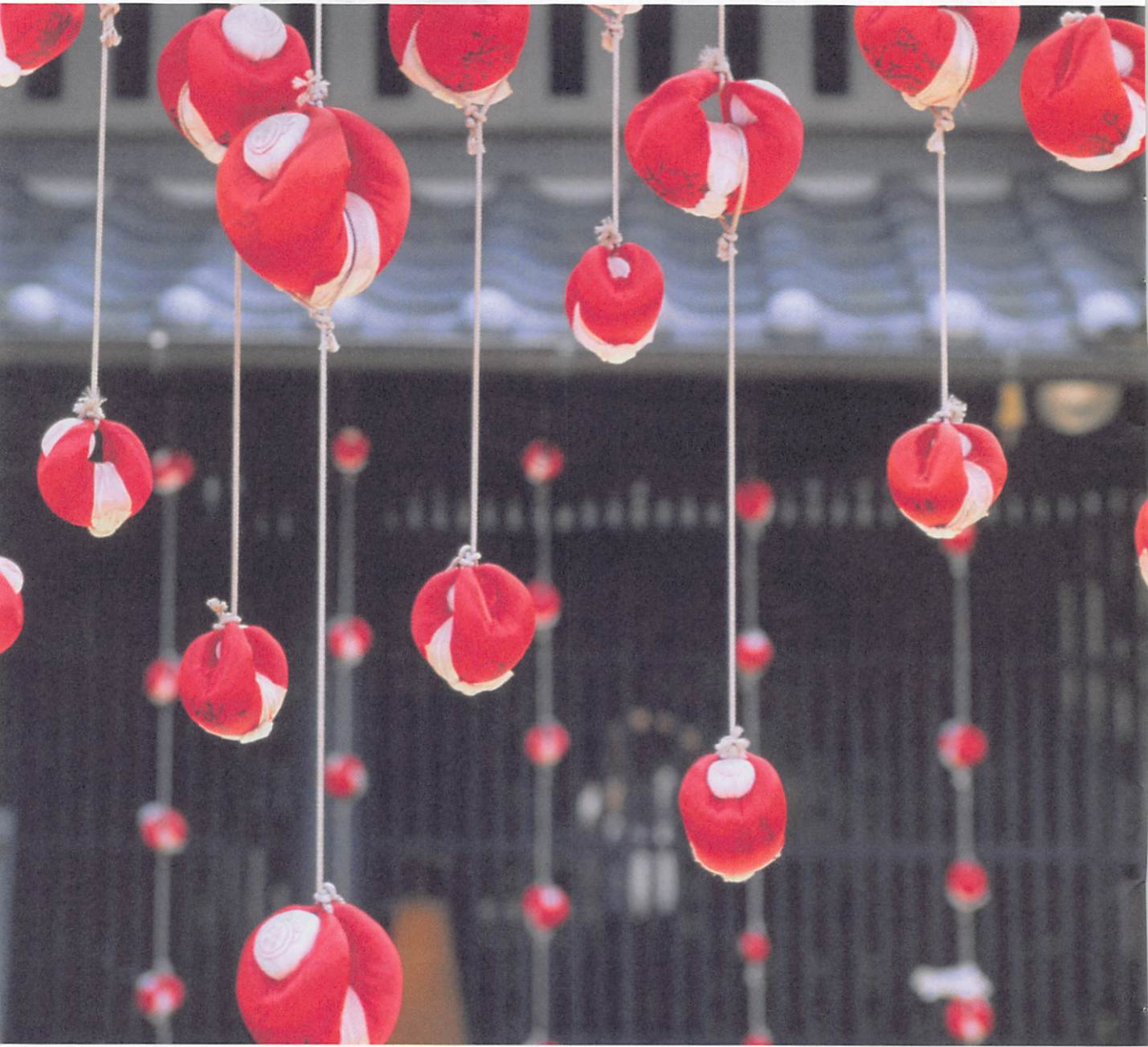
### 持続可能な奈良の創造

奈良は全ての人々に、平和で、安全で、持続可能な都市のあり方を問い続けている歴史文化の生き証人です。ただ遺跡があるのではなく、時代を超えて多くの人々が保存と修復の活動を継承し、持続可能な生活芸術文化の展開を継承し、変革させてきました。

奈良は、歴史文化を通じてSDGsを学ぶ国際的な舞台ですが、多様な参加体験学習の仕組みが日々生み出され実践されている国際的なESDムーブメントの舞台であり、持続可能な「経験経済」が創造されている舞台でもあるのです。

(福井昌平 イベント学会副会長)





身代わり申

## 1. 町名から見るならまち

古い町並みを目当てに観光客が多く訪れる奈良町ですが、「奈良町」という地名は存在しません。このあたりは、元々元興寺がんこうじの境内であったところが、戦国時

代の後半から江戸時代にかけて都市開発され、形作られたと考えられています。

奈良町の中にある町名から、それをうかがい知ることができます。



## 奈良町の中にある町名

のういんちやう しょうな みちやう じゅうりんいんちやう がんりんいんちやう 納院町、勝南院町、十輪院町、元林院町など	「院」……………	大きな寺の中にあった小さな寺院
やくしどうちやう かわらどうちやう くのどうちやう 薬師堂町、瓦堂町、公納堂町など	「堂」……………	仏像などが収められていた建物
たかみかどちやう いまみかどちやう しもみかどちやう 高御門町、今御門町、下御門町など	「御門」……………	元興寺にいくつかあった門の一つ
あたらしんやちやう しほしんやちやう にししんやちやう 中新屋町、芝新屋町、西新屋町など	「新屋」……………	もとは元興寺の境内であったところに新しく家が建てられたところ
ひがしきつじちやう ふしんがづしちやう いまづしちやう 東木辻町、不審ヶ辻子町、今辻子町など	「辻」「辻子」…	道が交差しているところ
しばつきぬけちやう かわのかみつぬけちやう 芝突抜町、川之上突抜町など	「突抜」……………	道がなかったところを貫通して新たに道をつくったところ

### 陰陽町

今では「いんようちょう」と呼びますが、以前は「いんぎよまち」「いんぎょうちょう」などと呼ばれていました。字のとおり、このあたりには時間と暦を司る陰陽師たちが住み、奈良暦（南都暦）を作っていたそうです。町内には、陰陽道の天

帝「<sup>あめのみなかぬしのかみ</sup>天御中主神」を祭神とする<sup>ちんたくれい ふ</sup>鎮宅霊符神社があり、ここにある二体の狛犬は、なぜか満面の笑みをたたえています。

これら以外にも、奈良町の歴史を感じさせる町名がたくさんあります。電柱や看板をキョロキョロ見ながら探してみてもはどうでしょうか。

## 2. 庶民の暮らしから感じる奈良町

奈良町を歩いていると、軒先に「身代わり<sup>のきさき</sup>申<sup>ざる</sup>」と言われる人形が吊るされている家をよく見かけます。言い伝えによると、人の体の中には<sup>さんし</sup>三尸の虫がいて、60日に一度回ってくる<sup>こうしん</sup>庚申の日の夜に人が寝ている間に体から抜け出し、天帝にその人の悪事を告げにいくというのだそうです。その報告により寿命が決まるというので、人々は庚申の日は、寝ずに「庚申さん」を供養したといひます。この身代わり申は、災いを代わりに受け止めてもらって家の中に入ってこないようにと、願いごとが書かれていたりします。大き

いのが大人、小さいのが子どもとされ、家族構成に合わせて吊るされています。

では、なぜ猿なのでしょう。伝説では、悪病や災難を持ってくるといふ三尸の虫は、猿が毛づくろいする姿を見て、自分たちを食べる様子に見えたので、恐れをなして逃げたそうです。三尸の虫がもう一つ嫌いなものが、こんにやくだそうす。そのため毎年3月の第2日曜と11月23日に、「庚申まつり」が行なわれ、参拝者に大根とこんにやくの田楽が振る舞われています。

(大西浩明 奈良教育大学特任准教授)



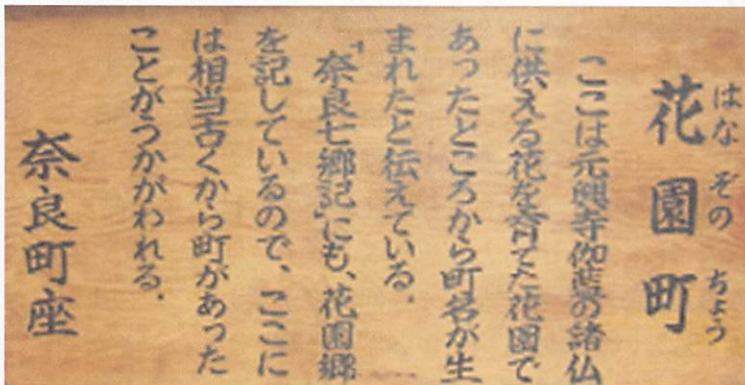


奈良町にぎわいの家



ならまち格子の家

奈良の町並み



このように町名の由来を説明する看板が見かけられます。探してみてください（筆者撮影）



身代わり申（筆者撮影）



## 旅あと ーあとがきに代えてー

みなさん、おかえりなさい。奈良の旅はどうでしたか。

持続可能な社会を創るためのヒントを、奈良で見つけていただけたでしょうか。SDGsは、「誰一人取り残さない」という、大きな野望を持った世界共通の目標です。これを達成するためには、私たち一人ひとりが自分にできることを行動に移していくことが大切です。そのためには、SDGsの目標を他人事ではなく自分のこととして捉える必要があります。

SDGsの17の目標は、一つ一つが独立したものではなく、それぞれが互いに関連し合っています。たとえば、プラスチックごみによって奈良のシカに被害が及んでいることは、⑫「つくる責任、つかう責任」に大きく関連しますが、プラスチックを減らすことによって、海洋プラスチックごみを減らすことにつながり、⑭「海の豊かさを守ろう」の達成にも貢献できますし、プラスチックの生産や焼却に関連して、③「すべての人に健康と福祉を」や、⑬「気候変動に具体的な対策を」の達成にも貢献します。このように、一つの行動を変えることによって、SDGsのいくつもの目標を達成することにつながります。

どうか、みなさん一人ひとりがSDGsを自分のこととして捉え、小さなことでも何か一つ行動を変えていきましょう。そして、持続可能な社会へと変革させていきましょう。



みなさんが奈良で感じていただいた、「持続可能な社会への気づき」を、みなさんの住む地域にも当てはめて考えてみてください。

奈良で見つけたSDGs？

あなたの地域でできること？

あなたの毎日の暮らしでできること？



# —奈良 SDGs 学びの旅—

## ○表紙に込めた思い

東大寺 / 上司永照さま (華厳宗教学部長 / 東大寺教学執事 / 東大寺総合文化センター  
総長 / 東大寺福祉事業団理事)

大仏さまが造られた頃の話をよくする。1270 年も前のこと。では 1270 年後のことも話したい。どんな世の中だろう。その時にいる人が 1270 年前のことや 2540 年前のことを話しているのだろうか。大仏さまは天地が安泰で動植物が栄える世の中になることを願って造られた。今もこの願いは持続している。この願いの本質を学びたい。そして、しあわせとはどういうことかを知りたい…

## ○奈良新しい学び旅推進協議会

奈良商工会議所 / 奈良県旅館・ホテル生活衛生同業組合 / 奈良教育大学 /  
(一財) 奈良県ビクターズビューロー / (公社) 奈良市観光協会 /  
(公社) ソーシャル・サイエンス・ラボ  
奈良県 / 奈良市

## ○発行者

奈良県旅館・ホテル生活衛生同業組合

## ○監修

長友恒人 (奈良教育大学名誉教授 / 日本 ESD 学会前会長)

## ○執筆者一覧

長友恒人 (奈良教育大学名誉教授)  
中澤静男 (奈良教育大学准教授)  
松村恵司 (奈良文化財研究所所長)  
辻野 亮 (奈良教育大学准教授)  
河本大地 (奈良教育大学准教授)  
西山 厚 (帝塚山大学客員教授)  
岡本彰夫 (奈良県立大学客員教授)  
後藤 治 (工学院大学理事長)

尾田榮章 (水と人・解工師)  
鹿谷 勲 (奈良民俗文化研究所代表)  
劉 麟玉 (奈良教育大学教授)  
松岡悦子 (奈良女子大学名誉教授)  
エバレット・ケネディ・ブラウン (写真家)  
福井昌平 (イベント学会副会長)  
大西浩明 (奈良教育大学特任准教授)

## ○表紙デザイン

東大寺 上司永照 / (公社) ソーシャル・サイエンス・ラボ

## ○編集・印刷

東京書籍株式会社

## ○問い合わせ先

(公社) ソーシャル・サイエンス・ラボ TEL : 0742-20-7807

## ○2021年3月 初版発行



**SUSTAINABLE  
DEVELOPMENT  
GOALS**